

○永代借地權ニ關スル法律明治三十四年九月
法律第三十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル永代借地權ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ハ之ヲ物權トシ民法中所有權ニ關スル規定ヲ適用ス

永代借地權ハ民法ノ規定ニ從ヒ他ノ權利ノ目的タルコトヲ得

地券、條約又ハ法令ニ別段ノ定メアル場合ニハ前二項ノ規定ヲ適用セス

第二條 永代借地權ノ移轉アリタルトキハ其ノ土地ノ所在地ヲ管轄スル地方廳ニ於テ地券ニ其ノ旨ヲ記載スルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第三條 永代借地權又ハ之ヲ目的トスル權利ニ關スル登記ニ付テハ登録稅ヲ課セス

第四條 永代借地權又ハ之ヲ目的トスル權利ニ關スル登記及永代借地ノ上ニ存スル建物ニ關スル登記ニ付テハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

附 則

第五條 本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第六條 民法施行法第四十五條ノ規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第七條 永代借地權又ハ之ヲ目的トスル權利ヲ本法施行前ニ地上權又ハ之ヲ目的トスル權利トシテ登記セラレタルモノハ永代借地權又ハ之ヲ目的トスル權利トシテ登記セラレタルモノト同一ノ効

三十四年九月
法律第三十九號
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル永代借地權ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

カヲ有ス

○永代借地權ニ關スル件明治三十四年九月
勅令第三百七十八號

朕永代借地權ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 永代借地ノ所在地ヲ管轄スル地方廳ニ於テ永代借地權ノ移轉シ地券ニ記載スルコトノ申請ヲ受ケタルトキ又ハ永代借地權ニ關スル届出ヲ受ケタルトキハ遲滯ナク其ノ永代借地ノ所在地ヲ管轄スル登記所ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ

永代借地權ノ移轉ニ關スル通知ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ通知書ニ永代借地券ノ謄本ヲ添附スヘシ但シ既ニ通知ヲ爲シタル永代借地ニ關シ更ニ通知ヲ爲ス場合ニ於テハ地券ノ謄本ヲ添附スルコトヲ要セス此ノ場合ニ於テハ通知書ニ永代借地ノ表示、當事者ノ氏名、國籍、住所、權利

移轉ノ原因及其ノ年月日ヲ記載スヘシ
第二條 永代借地及永代借地ノ上ニ存スル建物ノ登記ニ付テハ特別ノ登記簿ヲ設ケ之ヲ登記所ニ備フヘシ

第三條 登記簿ハ永代借地登記簿及永代建物登記簿ノ二種トス

第四條 永代借地登記簿ハ其ノ一用紙ヲ登記番號欄、表題部及甲乙丙丁戊ノ五區ニ分チ尙表題部ニ表示欄、表示番號欄ヲ設ケ各區ニ事項欄、順位番號欄ヲ設ク

登記番號欄ニハ各永代借地ニ付登記簿ニ始メテ登記ヲ爲シタル順序ヲ記載ス

表示欄ニハ永代借地ノ表示ヲ爲シ及其ノ變更ニ關スル事項ヲ記載シ表示番號欄ニハ表示欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

甲區事項欄ニハ永代借地權ニ關スル事項ヲ記載ス

乙區事項欄ニハ地上權、永小作權及此等ノ權利ヲ目的トスル他ノ權利ニ關スル事項ヲ記載ス

丙區事項欄ニハ地役權ニ關スル事項ヲ記載ス

丁區事項欄ニハ先取特權、質權及抵當權ニ關スル事項ヲ記載ス

戊區事項欄ニハ質借權ニ關スル事項ヲ記載ス

順位番號欄ニハ事項欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

第五條 永代借地建物登記簿ハ其ノ一用紙ヲ登記番號欄、表題部及甲乙丙丁ノ四區ニ分テ尙表題部ニ表示欄、表示番號欄ヲ設ケ各區ニ事項欄、順位番號欄ヲ設ケ

登記番號欄ニハ各建物ニ付登記簿ニ始メテ登記ヲ爲シタル順序ヲ記載ス

表示欄ニハ建物及附屬建物ノ表示ヲ爲シ及其ノ變更ニ關スル事項ヲ記載シ表示番號欄ニハ表示欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

甲區事項欄ニハ所有權ニ關スル事項ヲ記載ス

乙區事項欄ニハ地役權ニ關スル事項ヲ記載ス

丙區事項欄ニハ先取特權、質權及抵當權ニ關スル事項ヲ記載ス

丁區事項欄ニハ質借權ニ關スル事項ヲ記載ス

順位番號欄ニハ事項欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

第六條 未登記ノ永代借地權ヲ目的トスル權利ハ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ永代借地權ヲ證スルニ足ルヘキ書面ヲ添附スヘシ

第七條 登記所ニ於テ永代借地權ノ移轉ニ關スル通知ヲ受ケタルトキハ其ノ永代借地權ノ既登記ナルト未登記ナルトヲ問ハズ職權ヲ以テ永代借地權移轉ノ登記ヲ爲スヘシ

既登記ノ永代借地權ニ關スル届出ノ通知ヲ受ケタル場合ニ於テ登記ニ變更ヲ生スヘキトキハ職權ヲ以テ變更ノ登記ヲ爲スヘシ

未登記ノ永代借地權ヲ目的トスル權利ニ付登記ノ申請アリタルトキハ職權ヲ以テ永代借地權ノ登記ヲ爲スヘシ

第八條 明治三十二年勅令第二百五十一號ヲ以テ定メタル期日前ニ永代借地及永代借地ノ上ニ存スル建物ニ關シ外國領事廳ニ於テ爲シタル登記ハ領事廳ヨリ登記簿又ハ其ノ謄本ヲ登記所ニ引渡シタルモノニ限リ本令ニ依リテ爲シタル登記ト同一ノ效力ヲ有ス

第九條 明治三十二年勅令第三百二十九號ニ依リテ登記セラレタル不動産ニ付本令施行ノ後登記ヲ爲ス場合ニ於テハ本令ニ依リテ備ヘタル登記簿ノ用紙中登記番號欄ニ其ノ登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ其ノ左側ニ前登記番號ヲ記載シ表示欄ニ不動産ノ表示ヲ移シ相當區順位番號欄及事項欄ニ舊登記簿ノ用紙ニ爲シタル登記ヲ移シ舊登記簿ノ用紙ヲ閉鎖スヘシ

前項ノ規定ハ外國領事廳ニ於テ登記セラレタル不動産ニ付本令施行ノ後登記ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第十條 永代借地權ハ他ノ名稱ニテ登記セラレタルモノト雖前條ノ規定ニ依リ登記ヲ移ス場合ニ於テハ之ヲ永代借地權ト記載スヘシ

第十一條 永代借地權又ハ永代借地ノ上ニ存スル建物ノ所有權ヲ目的トスル權利ニ付登記ヲ爲ス場合ニ於テ登記スヘキ權利第四條又ハ第五條ノ規定ニ適合セザルトキハ登記用紙ノ各區中其ノ權利ト最モ類似スル權利ヲ登記スヘキ區ニ其ノ登記ヲ爲スヘシ

第十二條 本令ニ規定セザル事項ニ付テハ不動産登記法ノ規定ヲ準用ス

附則

第十三條 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第十四條 明治三十二年勅令第三百二十九號ハ之ヲ廢止ス

○帝國ノ臣民又ハ法人ニ於テ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シタル場合ニ關スル件明治三十四年九月勅令第三百七十九號
朕帝國ノ臣民又ハ法人ニ於テ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シタル場合ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 帝國臣民又ハ法人カ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永

三十四年內務省令第十七號
登記法施行細則改正

三十四年內務省令第二十四號
號ヲ以テ本號

第一條ニ依リ
所有權取得ノ
定ム

正編下卷二八
丁拾七

代借地權ヲ取得シタルトキハ通牒ナク其ノ土地所在地ヲ管轄スル地ノ廳 永代借地券ヲ提出シテ抹消ヲ受クヘシ
前項ニ依リ永代借地券ノ抹消ヲ受クタルトキハ帝國ノ臣民又ハ法人ハ其ノ土地ノ所有權ヲ取得ス

第二條 帝國ノ臣民又ハ法人カ前條第一項ノ規定ニ依リ永代借地券ノ抹消ヲ受クタルトキハ地方廳ハ其ノ土地所在地ヲ管轄スル登記所ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ

第三條 第一條ノ場合ニ於テ永代借地權ヲ目的トシタル權利ヲ有スル第三者アルトキハ其ノ權利ハ所有權ヲ目的トシタルモノトシテ存續ス

附則

第四條 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第五條 明治三十二年勅令第三百三十三號ハ之ヲ廢止ス

第六條 政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ニシテ本令施行前帝國法人ノ取得シタルモノハ其ノ土地ニ付既ニ所有權ノ登記アリタル場合ヲ除キ永代借地權トシテ存續ス但シ第一條ニ依リ所有權ヲ取得スルコトヲ妨ケス

○政府ノ債務ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニ於ケル規定明治二十六年十二月勅令第二百六十一號

第十九號

帝國ノ臣民又ハ法人ニ於テ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シタル場合ニ關スル件

沿革略記 明治二十四年六月勅令第五十五號ヲ以テ本令ヲ制定ス○二十六年十二月勅令第二百六十一號ヲ以テ改正ス
朕明治二十四年勅令第五十五號ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十四年勅令第五十五號左ノ通告正ス

第一條 政府ヲ第三債務者トシテ發スル差押命令ハ左ノ二項ニ掲クルモノ、外仕拂命令官ニ宛テ之ヲ發スルモノトス
仕拂命令官既ニ現金前渡ノ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ發シタル場合ニ於テハ現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ向テ差押命令ヲ發スルモノトス但記名公債元利ニ對スル差押命令ハ公債元利ノ仕拂ヲ取扱フ銀行ニ向テ發スルモノトス
預金、保費金、供託金ニ對スル差押命令ハ中央金庫ニ係ルモノハ金庫出納役、本支金庫ニ係ルモノハ關係ノ金庫出納役代理人ニ向テ發スルモノトス
第二條 繼續收入ノ債權差押ノ場合ニ於テ關係官廳又ハ金庫ニ變更アルトキハ甲官吏又ハ甲金庫ノ受ケタル差押命令ハ乙官吏又ハ乙金庫ニ於テ之ヲ承繼スルモノトス
第三條 差押債權者差押命令送達ノ通知ヲ受ケタルトキ緊急ノ場合ニ於テハ仕拂ヲ執行スヘキ金庫ニ向ヒ假リニ仕拂ノ停止ヲ求ムルコトヲ得
第四條 仕拂命令、仕拂請求書、集命仕拂命令、集命仕拂請求書及現金引出切符ヲ政府ノ債權者ニ交付シタル後差押命令ヲ受ケタルトキハ當該仕拂命令官又ハ現金前渡ヲ受ケタル當該官吏ハ速カニ金庫ニ向テ差押金額ハ仕拂ヲ停止スヘシ

二十七年大藏省令第七號ヲ以テ第七條ヲ定ム

第五條 差押ヘラレタル金額ヲ裁判所ノ命令ニ依リ差押債權者ニ仕拂フヲ要スルトキハ當該仕拂命令官、現金前渡ヲ受ケタル當該官吏、銀行又ハ金庫ニ於テ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ
第六條 配當要求ノ送達又ハ民事訴訟法第六百七條ノ命令ヲ受ケタル場合ニ於テハ當該仕拂命令官、現金前渡ヲ受ケタル當該官吏、銀行又ハ金庫ニ於テ供託ノ手續ヲ爲スヘシ
第七條 差押金額ノ仕拂停止、仕拂執行又ハ供託ニ關スル手續ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ
第八條 假差押命令ノ場合ニ於テハ本令ヲ準用ス
附則
第九條 本令ハ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

○ 政府ト私人トノ債務相殺ニ關スル件 明治三十四年六月勅令第三百三十一號
朕政府ト私人トノ債務相殺ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
民法ノ規定ニ從ヒ政府ト私人トノ債務ヲ相殺スルトキハ其ノ相殺シタル金額ハ金庫又ハ現金前渡官吏ニ於テ之ヲ差引クヘシ
前項ニ依リ金庫ニ於テ差引シタル金員ハ歲入徵收官ノ計算ニ移シ直ニ當該官吏ニ報告シ現金前渡官吏ニ於テ差引シタル金員ハ相殺額表ヲ添ニ收入官吏ニ送付スヘシ

（Faint, illegible text in a large rectangular frame, likely bleed-through from the reverse side of the page.)

○第二十一類 警察、監獄、感化

正編下卷六十一
丁類

○移民保護法中改正明治三十四年四月
法律第二十三號

朕帝國議會 協賛ヲ經タル移民保護法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

移民保護法中左ノ通改正ス

第七條ヲ第七條ノ一トシ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第七條ノ二 移民取扱人ハ渡航ノ周旋ヲ爲シタル移民ニ對シ渡航ノ日ヨリ滿十箇年間第三條第二

項ニ規定シタル保證人ノ義務ヲ負フ

第十三條第一項ヲ左ノ如ク改ム

移民取扱人ハ勞働契約ニ因リ渡航スル移民ノ渡航ノ周旋又ハ募集ヲ爲ストキハ移民ト書而契約ヲ

爲シ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第十四條 移民取扱人ハ手数料ノ外何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス移民ヨリ金錢又ハ物品ヲ受クル

コトヲ得ス但シ其ノ手数料ハ豫メ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第十八條 行政廳ニ於テ移民取扱人移民ニ對シ契約ヲ履行セス又ハ第七條ノ二ニ規定シタル保證人

ノ義務ヲ履行セスト認メタルトキハ保證金ヨリ其ノ費用ヲ支出シテ移民ヲ救助シ又ハ歸國セシム

ルコトヲ得

○第二十三類 官制

○内閣
○議院建築調査會規則ノ廢止ノ件
○議院建築調査會規則ハ之ヲ廢止ス

○第二十三類 官制

○内閣

○議院建築調査會規則廢止ノ件明治三十四年十月勅令第百九十一號

○議院建築調査會規則ノ廢止ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
議院建築調査會規則ハ之ヲ廢止ス

○宮内省

○宮内省官制中改正明治三十四年一月宮内省達中第一號

- 宮内省官制中左ノ通改正ス
- 一第三十條中「雅樂部長一人」ノ下「式部官賞典ノ内ヨリ兼補」ノ十一字ヲ削除ス
- 一第四十二條中「樂師長ノ官等」六等以下「トアルヲ」五等以下ニ改ム
- 一第四十五條中「帝室會計審査官五人」ノ下「奏任」トアルヲ「三等以下六等以上」ニ改メ同官ノ次ニ左

正編下卷二八
一丁参考

正編下卷二九
一丁参考

ノ一項ヲ追加ス

帝室會計審査官補帝室會計審査官補ヲ以テ之ガ監ヲ

六等以下

帝室會計審査官ノ職務ヲ補助ス

第五十條高等官俸給表欄外奏任官ノ部第一項中「審査官」ノ下ニ「審査官補」ノ四字ヲ加フ

○同上明治三十四年六月
宮内省議甲第三號

一宮内省官制第三十四條中御料局主事「三人」ヲ「一人」ニ御料局理事「五人」ヲ「三人」ニ御料局理事

「二十二人」ヲ「二十八人」ニ改メ「御料局監守准判任四等以下」ノ十二字ヲ削除ス

一同第五十條丁表中御料局監守ノ欄ヲ削除ス

○同上明治三十三年十月
宮内省議甲第四號

一宮内省官制第四十三條中主獵局監守ノ次ニ左ノ一項ヲ追加ス

主獵局副監長
准判任四等以下

一宮内省官制第五十條丁表中主獵局監守ノ次ニ副監長ノ一項ヲ追加シ其俸給ヲ三十五圓以下ト定ム

正編下卷三
九丁参看

○東宮御所御造營局官制中改正明治三十四年三月
宮内省議甲第二號

東宮御所御造營局官制第二條中技師「三人」ヲ「四人」ニ改ム

○明治三十三年
宮内省議甲第三號

正編下卷三四
三丁参看

○外務省

○在外公館職員定員令中改正明治三十四年六月
勅令第三百二十四號

朕在外公館職員定員令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外公館職員定員令中左ノ通改正ス

第一條中「三十五人」ヲ「三十七人」ニ「百二十三人」ヲ「百二十六人」ニ改ム

○内務省

○臨時土木工事ニ關スル職員中改正明治三十四年四月
勅令第四十八號

朕明治二十七年勅令第八十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十七年勅令第八十五號中「九十八人」ヲ「百人」ニ改ム

○

○神宮司廳官制中改正明治三十三年九月
勅令第三百七十六號

朕神宮司廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二十三類

在外公館職員定員令中改正
臨時土木工事ニ關スル職員中改正
神宮司廳官制中改正

正編下卷三六
三丁参看

神宮司廳官制中左ノ通改正ス

第一條 中禰宜ノ下「三人」ヲ「十人」ニ權稱宜ノ下「七人」ヲ「二十人」ニ改メ「主典二十人」ヲ削ル

第七條 削險

第八條 中「主典」ヲ「權稱宜」ニ改メ「大麻及曆ヲ製造シ」ヲ削ル

第十條 大宮司ハ所屬判任官、神部署職員申判任待遇ノ官ニ在ル者及神宮衛士長衛士副長衛士ノ進退及懲戒ヲ内務大臣ニ具狀ス

「宮司」ヲ「大宮司」ニ「權稱宜」ヲ「少宮司」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○

神部署官制明治三十三年九月

朕神部署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

神部署官制

第一條 神部署ハ神宮大宮司ノ監督ニ屬シ大麻、曆ノ製造頒布及臣民ノ奉饗ニ關スル事ヲ掌ル

第二條 神部署ニ左ノ職員ヲ置ク

署長

一人 奏任待遇

神部 二人 奏任待遇

神部補 十四人 判任待遇

第三條 署長ハ一切ノ署務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 神部ハ署長ノ命ヲ承ケ署務ヲ分掌ス

第五條 神部補ハ署長及神部ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條 神部署ニ參務員ヲ置クコトヲ得

參務員ハ奏任待遇トス署長ノ諮詢ニ應ジ署務ニ關シ意見ヲ開申ス

第七條 署長事故アルトキハ上席神部其ノ事務ヲ代理ス

第八條 署長神部及參務員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ジ神部補ハ内務大臣之ヲ命ス

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○

神宮衛士長衛士副長衛士ニ關スル件中改正明治三十三年九月

朕明治三十一年勅令第百八十九號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十一年勅令第百八十九號中左ノ通改正ス

第二條 中「宮司」ヲ「大宮司」ニ改ム

第二十三類

神宮衛士長衛士副長衛士ニ關スル件中改正

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○臨時検査職員明治三十一年十月勅令第三百六十八號

朕臨時検査職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

検査豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシムル爲メ内務省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ衛生局ニ屬セシム(三十三年勅令第二百三十三號ヲ以テ職員定員改正)

事務官 專任三人 奏任

接 手 專任三人

書記 專任一人 判任

附則

本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス
臨時検査局官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○血清藥院官制中改正明治三十四年勅令第七十號

朕血清藥院官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

血清藥院官制中左ノ通改正ス

第三條中「專任一人」ヲ「專任二人」ニ「專任五人」ヲ「專任六人」ニ改ム

○臨時「ベスト」豫防事務局官制明治三十三年十二月勅令第四百十號

朕臨時「ベスト」豫防事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時「ベスト」豫防事務局官制

第一條 大阪府大阪市ニ臨時「ベスト」豫防事務局ヲ置ク

第二條 臨時「ベスト」豫防事務局ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ大阪府管内ノ「ベスト」豫防ニ關スル事務ヲ掌理ス

第三條 臨時「ベスト」豫防事務局ニ左ノ職員ヲ置ク

長 官 一人

次 長 一人

事務官 六十人

検査醫 六十人

書記

監 吏 六十人

前項ノ外臨時「ベスト」豫防事務局ニ四人以内ノ顧問ヲ置クコトヲ得

第四條 長官ハ大阪府知事、次長ハ大阪府警部長ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 事務官ハ内務省高等官及大阪府高等官ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第六條 検査醫、書記及監吏ハ長官之ヲ命ス

第七條 顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第八條 官吏ニシテ臨時「ベスト」豫防事務局職員タル者ハ各其ノ本官ノ待遇ヲ受ク

第九條 長官ハ局中一切ノ事務ヲ總理シ所部ノ職員ヲ指揮監督ス

長官事故アルトキハ次長其ノ職務ヲ代理ス

第十條 次長ハ長官ノ命ヲ承ケ部下ノ職員ヲ監督シ局務ヲ掌理ス

第十一條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第十二條 検査醫ハ上官ノ指揮ヲ承ケ検査事務ニ従事ス

第十三條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十四條 監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ清潔方法消毒方法ノ施行及鼠族驅除ニ關スル事務ヲ監察ス

第十五條 顧問ハ「ベスト」豫防事務局ニ關シ長官ノ諮詢ニ應ジ並長官ニ意見ヲ具申ス

第十六條 臨時「ベスト」豫防事務局ニ六部ヲ置キ事務ヲ分掌スルコト左ノ如シ

第一部 踏査調査ニ關スル件

第二部 健康診断死體檢案ニ關スル件

第三部 清潔方法消毒方法施行ニ關スル件

第四部 豫防接種ニ關スル件

第五部 鼠族驅除ニ關スル件

第六部 庶務會計其ノ他他部ニ屬セザル件

第十七條 大阪府以外ノ地ニ在職ノ官吏ニシテ臨時「ベスト」豫防事務局職員ヲ兼スル者ニハ一箇月

百二十圓以内其ノ他ノ職員ニハ一箇年七百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得但シ検査醫、書記及監

吏ニ支給スヘキ手當ハ内務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 明治三十三年勅令第九十七號ニ依リ大阪府ニ設置シタル検査官ハ「ベスト」豫防事務局ニ關

シテハ臨時「ベスト」豫防事務局長官ノ指揮監督ニ屬セシム

○臨時検査局官制廢止勅令第三十三号(明治三十三年九月十九日)

朕臨時検査局官制ノ廢止ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時検査局官制ハ之ヲ廢止ス

○大藏省

○稅關官制中改正明治三十四年五月勅令第九十三號

朕稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
稅關官制中左ノ通改正ス

第四條中監視ノ下「七十八人」ヲ「百八人」ニ鑑定官補ノ下「百十八人」ヲ「百四十八人」ニ監吏ノ下「六百八十二人」ヲ「七百四十二人」ニ改ム

○稅關管轄區域中改正明治三十四年八月勅令第九十二號

朕明治二十三年勅令第二百四號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年勅令第二百四號中左ノ通改正ス

大阪稅關管轄區域中攝津四郡ノ下ニ「山城」ヲ加ヘ「七箇國」ヲ「八箇國」ニ改ム

○稅務管理局官制中改正明治三十四年五月勅令第九十三號

朕稅務管理局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正編下卷三九
八丁參看

正編下卷四〇
二丁參看

正編下卷四〇
六丁參看

稅務管理局官制中左ノ通改正ス

第三條 稅務管理局管轄內須要ノ地ニ稅務署及稅務支署ヲ置ク稅務署ノ位置及管轄區域ハ別ニ勅令

ヲ以テ之ヲ定メ稅務支署ノ位置及管轄區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

第八條中「百人」ヲ以テ定員トス「ヲ」專任百人トスニ改ム

第九條中「五千八百十九人」ヲ「專任六千三百四十八人」ニ「三百七十五人」ヲ以テ定員トス「ヲ」專任四

百三十九人トスニ改メ「若ハ稅務署」ヲ「稅務署若ハ稅務支署」ニ改ム

第十條第一項中「各稅務署」ヲ「稅務署及稅務支署」ニ改メ第二項中「稅務」ヲ削ル

○稅務管理局稅務署及管轄區域中改正明治三十四年八月勅令第九十二號

朕明治二十九年勅令第三百四十六號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十九年勅令第三百四十六號稅務管理局稅務署及管轄區域表中左ノ通改正ス

東京稅務管理局東京府ノ部幸橋稅務署ノ項中「小笠原島」ヲ削リ府中ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

小 笠 原 小 笠 原 島

附 則

第二十三號

稅關官制中改正 稅關管轄區域中改正 稅務管理局官制中改正 稅務管理局稅務署及管轄區域中改正 專任員官制中改正

正編下卷四〇
九丁參看

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○ 專賣局官制中改正明治三十四年四月勅令第六十五號

朕專賣局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

專賣局官制中左ノ通改正ス
第三條中屬ノ下「專任千八百八十八人」ヲ「專任千七百七十四人」ニ監視ノ下「專任二百二十八人」ヲ「專任四百四十九人」ニ改ム

○ 陸軍省

○ 陸軍省官制中改正明治三十四年七月勅令第五十三號

朕陸軍省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍省官制中左ノ通改正ス

陸軍省官制附表中「參事官」ノ下「二」ノ上ニ「專任」ヲ加フ

正編下卷四
九丁參府

正編下卷四
九丁參府

○ 防務條例明治三十四年一月勅令第一號

朕防務條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

防務條例

第一條 本條例ハ永久ノ目的ヲ以テ海岸ニ建設シタル防禦地點ノ防禦ニ關シ陸海軍協同作戰ノ分擔任務及其計畫指揮ヲ規定ス

第二條 海岸防禦地點ノ防禦ハ陸海軍協同シテ之ニ任スルモノトス而シテ陸海兩軍ノ性質ニ因リ分擔スヘキモノ概ネ左ノ如シ

甲 陸軍ノ擔任

其一 陸地警戒勤務

其二 陸地防禦工事

其三 諸砲臺ノ勤務

其四 砲臺通信勤務

乙 海軍ノ擔任

其一 海上警戒勤務

其二 海中防禦及之ニ屬スル諸勤務

其三 船艦ヲ以テスル諸勤務

第二十三類 陸軍省官制中改正 防務條例

其四 海上通信勤務

第三條 平時陸海軍相連繫スル防禦計畫ノ要領ハ參謀總長海軍軍令部長 出陣シ裁定ノ後陸軍大臣

及海軍大臣ニ移ス陸軍大臣若クハ海軍大臣ハ之ヲ當該長官ニ令達スルモノトス

第四條 東京灣、吳、佐世保、舞鶴ノ防禦ニ在テハ鎮守府司令長官及要塞司令官、由良、鳴門、藤原、下

ノ關、長崎、函館、對馬、基隆、澎湖島ノ防禦ニ在テハ要塞司令官、要港部司令官、警備隊司令官及海

軍防禦部長第二條ノ規定ニ依リ各其擔任ノ事項ヲ計畫ス

第五條 鎮守府司令長官、要塞司令官、要港部司令官、警備隊司令官及海軍防禦部ノ長ハ其協同作戰

上相連繫スル事項ニ關シテハ互ニ諮議協商スヘシ

第六條 第四條ノ各防禦地ニ在テハ陸海軍司令官ノ下ニ互ニ連繫司令部ノ將校ヲ兼務セシム

第七條 凡テ策定セシ防禦計畫ハ毎年三月左ノ如ク報告移牒スヘシ

一 要塞司令官及警備隊司令官ハ二通ヲ關製シ所管師團長ヲ經由シ參謀總長ニ報告シ參謀總長ハ

其一通ヲ海軍軍令部長ニ移ス

二 鎮守府司令長官、要港部司令官及海軍防禦部ノ長ハ二通ヲ關製シ海軍軍令部長ニ報告シ海軍

軍令部長ハ其一通ヲ參謀總長ニ移ス但海軍防禦部ノ長ヨリ出ス報告ハ所管鎮守府司令長官ヲ

經由ス

三 基隆及澎湖島ノ防禦計畫ハ臺灣總督ヲ經由シ參謀總長若クハ海軍軍令部長ニ報告スルモノト

ス參謀總長及海軍軍令部長ノ互ニ其一通ヲ移スコトハ前二項ニ同シ

第八條 第四條各防禦地點ノ戰時ノ指揮官ハ毎年三月陸軍大臣海軍大臣ト協議シ親裁ヲ經テ之ヲ定

ム但シ陸軍大臣ハ參謀總長海軍大臣ハ海軍軍令部長ニ協議スルモノトス

四月一日ヨリ翌年三月盡日迄ノ間ニ指揮官ニ變更ヲ要スルトキハ同手續ニ依リ更ニ之ヲ定ム

第九條 戰時指揮官ノ幕僚ハ陸海兩軍ノ將校ヲ以テ編成ス其任命ハ臨時ニ指揮官ノ選定ト同キ手續

ヲ經テ之ヲ行フモノトス但シ鎮守府司令長官、要塞司令官、要港部司令官、警備隊司令官ヲ以テ前

條ノ指揮官ヲ兼掌セシムルトキハ別ニ幕僚ヲ編成セス指揮官タル各官ノ幕僚ニ所要ノ人員ヲ增加

ス

第十條 舞鶴軍港ニ鎮守府ヲ澎湖島ニ要港部ヲ置カサル間ハ同港防禦上海軍ノ擔任ニ係ル事項ハ海

軍首席將校之ヲ司リ基隆及澎湖島ニ要塞司令部ヲ置カサル間ハ同港防禦上陸軍ノ擔任ニ係ル事項

ハ要塞砲兵隊長之ヲ司リ其防禦計畫ノ報告移牒ハ第七條ニ准シ之ヲ行フモノトス

○

○ 教育總監部條例中改正 明治三十四年十月 勅令第三百九十四號

朕教育總監部條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

教育總監部條例中左ノ通改正ス

第十三條 各兵監ハ主管ノ事項ニ就キ當該兵科ノ團隊ヲ檢閲シ之ニ關スル意見ヲ團隊長ニ訓示シ檢

正編下卷四七
二丁添看

閣下其實況ヲ教育綱盛ニ報告スヘシ

○陸軍大學校條例(明治三十四年十月
勅令第百八十五號)
陸軍大學校條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
陸軍大學校條例

第一條 陸軍大學校ハ才幹アル少壯士官ヲ選拔シテ高等用兵ニ關スル學術ヲ修メシメ併テ軍事研究
ニ須要ナル諸科ノ學識ヲ増進セシムル所トス

第二條 學生教育ノ實施ハ參謀總長ノ定ムル教育綱領ニ據ル

第三條 本校ニ左ノ職員ヲ置ク

- 校長 少將
- 幹事 大中佐(高級參謀ノ專任佐
官兵學教育員兼勤)
- 副官 大尉
- 軍醫
- 獸醫
- 軍吏

附屬下卷四二
四丁添行

兵學教官 陸軍將官陸海軍佐官及陸海軍大尉

馬術教官 少佐大尉

教官 監督部、衛生部、獸醫部上長官若ハ監督補一、等軍醫一、等獸醫陸軍教授

下士、判任文官

第四條 校長幹事及專任ハ兵學教官ハ參謀官トス

第五條 校長ハ參謀總長ニ隸シテ校務ノ總理シ幹事及諸教官ヲ統督シテ學生教育ノ責ニ任ス

第六條 幹事ハ校長ヲ補佐シ教育ノ實施及其ノ齊一ヲ規畫シ副官軍醫獸醫軍吏ヲ督シ校務ヲ整理シ

且學生ヲ監督ス

第七條 副官軍醫獸醫軍吏ハ校長ノ命ニ從ヒ各事務ヲ擔任ス

第八條 兵學教官馬術教官及教官ハ校長ノ命ニ從ヒ學術ノ教授ニ任ス

少佐馬術教官ハ大尉馬術教官ヲ指揮シ校庭一切ノ事務ヲ統ヘ馬匹ノ調教ヲ掌ル

第九條 陸軍大學校學生ハ左ノ資格ヲ備フルモノヨリ選拔ス
各兵科ノ中少尉ニシテ二年以上入校當年七月一日以前 隊務ニ服シニ派遣中ノ時日ハ隊務トシテ計算スルコトヲ得 身體強健

勤務精勵學才ニ富ミ且操行高尚ニシテ將來大ニ發達ノ見込アルモノ

第十條 聯隊長(獨立隊ニ在リテハ其ノ隊長官衛學校ハ前條ノ資格アルモノヲ選拔シ學生候補名簿ヲ製シ順序
等ニ在リテハ其ノ所屬長以下同シ)ヲ經テ所管長官ニ進達シ所管長官ハ之ニ意見ヲ附シ毎年一月盡日迄ニ參謀總長ニ進達ス

聯隊長ハ學生候補者選拔ニ關シテハ特ニ擔保ノ責ニ任ス

第十一條 學生候補者試験課目並初審試験開始ノ時日ハ參謀總長ノ移牒ニ由リ毎年十二月陸軍大臣之ヲ告達ス

第十二條 參謀總長ハ候補者ノ學力ヲ檢定スル爲ニ試験委員ヲ設ケ校長ヲ委員長ト爲シ以テ左ノ試験ヲ行フ

其一 初審試験

初審試験ハ候補者ノ學識ヲ檢定スルモノニシテ各師管毎ニ當該師團長近衛師團ニ在リテハ近衛師團長 近衛師團ニ在リテハ守備師團長 族團長以下同シ以テ定ムル場所ニ所管ノ候補者ヲ集メ參謀長若ハ參謀ヲ監視下ニ在リテ各地同時ニ筆記ノ試験ヲ行フ之カ爲毎年三月試験委員長ヲシテ試験問題ニ受験者名簿ヲ添ヘ當該師團長ニ送付セ

初審試験終レハ各師團長ハ解答書類ヲ纏メ直ニ試験委員長ニ送付スルモノトス

試験委員長ハ試験委員ヲシテ其ノ成績ヲ調査セシメ順次名簿ヲ製シテ參謀總長ニ進達ス

其二 再審試験

再審試験ハ學力ノ活用ヲ檢定スルモノニシテ陸軍大學校ニ於テ之ヲ行フ 參謀總長ハ試験委員長ノ進達セシ順次名簿ニ據リ受験人名ヲ決定シ陸軍大臣ニ移ス陸軍大臣ハ各所管長官ヲシテ其ノ受験者ヲ七月二十日迄ニ陸軍大學校ニ派遣セシム

再審試験終レハ各受験者ヲ其ノ所管ニ復歸セシム

第十三條 參謀總長ハ前條ノ試験書類及學生候補名簿ヲ參照シ入學者ヲ裁定シ之ヲ陸軍大臣ニ移シ

陸軍大臣ハ之ヲ入學ヲ命シ十一月廿日迄ニ陸軍大學校ニ届告セシム

第十四條 陸軍中學生ノ名籍ハ原所管軍團長ニテ之ヲ管理スルニシテ雖願屆其ノ他業務上ニ關シテハ總テ校長

ノ管理ニ屬ス

第十五條 學生ノ修學期限ハ三箇年トシ其ノ各學年ノ學期ハ十二月ニ始マリ翌年十一月ニ終ル

第十六條 校長ハ學生入學以後ニ其ノ資格不適合ト認ムルコトアルトキハ參謀總長ニ具狀ス參謀總長ハ之ヲ查點シ陸軍大臣ニ移シ退學ヲ命シ原所管ニ復歸セシム

疾病ノ爲ニ缺課多シモ尙卒業ヲ見込アルモノニアリテハ校長ノ上申ニ由リ參謀總長ハ之ニ滯學ヲ命スルコトアル

第十七條 毎年八月ヨリ十月ニ亘リ學生ヲ各兵種ノ部隊ニ派遣シ隊附勤務ヲ爲サシム隊附勤務ハ通常秋季演習ヲ以テ終リト爲ス但シ陸軍大學校ノ授業上必要ト認ムルトキハ校長ハ期ニ先テ學生ヲ

召還スルコトヲ得

第十八條 學生隊附勤務ヲ終レバ當該隊長ハ其ノ成績ヲ校長ニ申報ス

第十九條 教育上適當ノ時機ニ於テ要塞砲兵射擊砲臺軍艦其ノ他製造所等ヲ實視セシム

第二十條 校長ハ各學期ノ終リニ於テ幹事及兵學教官ヲ會シ學生ノ修學結果及伎倆ヲ審査シ第一第二學年學生ノ爲ニハ其ノ修學結果報告ヲ第三學年學生ノ爲ニハ伎倆證明書並成績順次名簿ヲ製シ

參謀總長ニ呈ス

第二十一條 學生ノ卒業者ニハ卒業證書及之ヲ表彰スヘキ徽章ヲ附與シ原所管ニ復歸セシム但シ成績不長ノモノニハ單ニ修學證書ノミヲ附與ス

第二十二條 修學ニ所要ノ圖書器具ハ貸與スルコトヲ得

第二十三條 武官教官ハ校務ニ差支ナキ時期ニ於テ隊附勤務ヲ爲サシメ若ハ機動演習ニ參與セシムルコトアルヘシ

第二十四條 校長ハ毎年學生ニ三週間以内ノ夏期休暇ヲ與フルコトヲ得

○臨時陸軍建築部官制 明治二十九年三月勅令第三十一號

朕臨時陸軍建築部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時陸軍建築部官制

第一條 臨時陸軍建築部ハ陸軍大臣ノ監督ニ屬シ兵營其ノ他ノ新設ノ臨時工事ヲ掌リ且ツ所屬地ヲ管轄ス但砲臺ノ建設ハ此ノ限ニ在ラス

第二條 明治三十三年勅令第二十三號ヲ以テ本條削除

第三條 臨時陸軍建築部ニ左ノ職員ヲ置ク (三十二年勅令第二百七十一號ヲ以テ本條中改正)

部長 一人

副部長 一人

事務官 專任七人

技師 專任六人

技手 專任二十七人

書記 專任十八人

第四條 明治三十三年勅令第二十三號ヲ以テ本條削除

第五條 部長及副部長ハ將官若クハ同相當官ヲ以テ之ニ任シ又ハ補ス (二十九年勅令第三百四十八號ヲ以テ本條改正)

第六條 事務官ハ上長官、士官若クハ同相當官ヲ以テ之ニ任シ又ハ補ス (三十三年勅令第二十三號ヲ以テ本條中刪除)

第七條 事務官ハ必要ノ場合ニ於テ他ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ文官任用令ノ規程ニ依ラス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

他ヨリ任用スル事務官ハ奏任トス

第八條 部長ハ陸軍大臣ノ命ヲ承ケ部務ヲ管理ス

第九條 副部長ハ部長ヲ補佐シ部長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第十條 明治三十三年勅令第二十三號ヲ以テ本條削除

第十一條 事務官ハ各部長ノ命ヲ承ケ部務ヲ分掌ス (三十三年勅令第二十三號ヲ以テ本條中刪除)

第十二條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ工務ヲ掌ル

第十三條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ從事ス

第十四條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
 第十五條 技手及書記ハ必要アル場合ニハ判任俸給豫算定額内ニ於テ雇員ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得
(三十二年勅令第二百七十) (五級ヲ以テ本條中削除)
 第十六條 書記ハ便宜下士ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得
 第十七條 他ヨリ任用スル事務官ノ官等俸給ハ別表ニ依ル
 第十八條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

別表

事務官	官 等						
	三	四	五	六	七	七	七
一級 二千五百圓	二級 二千二百圓	四級 千八百圓	六級 千四百圓	八級 千	九級 九百圓	十級 八百圓	等
	三級 二千圓	五級 千六百圓	七級 千二百圓				

○衛戍病院條例中改正明治三十三年十一月勅令第四百五號
 朕衛戍病院條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

衛戍病院條例中左ノ通改正ス
 第五條附註中「第一師團長」ノ下ニ「習志野ニ在テハ騎兵第二旅團長」ヲ加フ

○憲兵練習所條例明治三十二年八月勅令第三百六十八號
 朕憲兵練習所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 憲兵練習所條例

第一條 憲兵練習所ハ憲兵司令部ニ置キ學生ニ憲兵ノ職務ニ必要ナル學術ヲ習修練磨セシメ以テ其實務ノ改良進歩ヲ圖ル所トス
 第二條 學生ハ各憲兵隊ヨリ士官下士及上等兵ヲ分遣セシメ之ニ充ツ
 第三條 憲兵練習所ニ左ノ職員ヲ置ク
 所 長 憲兵中、少佐
 副 官 憲兵大、中尉
 教 官 少佐大中尉及高等文官
 下士及判任文官
 第四條 所長ハ憲兵司令官ニ繼シ所務ヲ總理シ學生教育ノ責ニ任ス
 第五條 副官ハ所内一般ノ庶務ヲ掌ル

- 第六條 教官ハ學生ノ教授ヲ分擔ス
- 第七條 學生ノ修學期ハ概ネ六箇月トス
- 第八條 學生ノ人員及入學時期ハ憲兵司令官陸軍大臣ノ認可ヲ請ケ之ヲ各憲兵隊長ニ令達ス
- 第九條 學生分遣ノ令達アレハ各憲兵隊長ハ修學ニ適當ノ者ヲ選定シ入學期日十五日前ニ其考科表寫ヲ添ヘ憲兵司令官ニ報告スヘシ
- 第十條 學生ハ所外ニ居住セシメ通學セシム但シ時宜ニ依リ所内ニ宿泊セシムルコトヲ得
- 第十一條 學生修學ニ所要ノ書籍器具消耗品ノ一部ハ貸與又ハ支給スルコトアルヘシ但シ下士上等兵ノ武器被服裝具ハ分遣ノ際之ヲ携帶セシム
- 第十二條 學生中ノ諸願届ハ所長ノ管理ニ屬ス
- 第十三條 學生ハ情願ヲ以テ歸省又ハ退學スルヲ許サスト雖病氣其他ノ事故ニ依リ學術習得ノ目途ナキ者ハ退學歸隊セシム
- 第十四條 憲兵司令官ハ修學期末ニ於テ所長教官ヲ集メ會議ヲ開キ學生修學ノ成績ヲ調査シ士官ニ在テハ修得證明書ヲ作り之ヲ本人所屬ノ隊長ニ交付シ下士上等兵ニ在テハ學術修業證書ヲ附與シ學生修學ノ成績ヲ陸軍大臣ニ報告スヘシ
- 附則
- 第十五條 第十三第十四及第十五憲兵隊ニ在テハ當分ノ内學生ヲ分遣セシメサルコトヲ得
- 第十六條 本條例ハ明治三十二年九月一日ヨリ施行ス

正閣下卷四八
六丁卷四

- 陸軍戸山學校條例中改正明治三十三年八月
勅令第三百四十五號
- 朕陸軍戸山學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 陸軍戸山學校條例中左ノ通改正ス
- 第二條第二號ヲ左ノ如ク改ム
- 二 射擊科學生ハ步、騎、砲、工、輜重兵士官ヲ以テ之ニ充ツ
- 第三條但書中「上申」ヲ「移牒」ニ、「定ム」ヲ「告達ス」ニ改ム
- 第六條中但書ヲ削ル
- 第八條中「佐官」教官ヲ以テ各科ノ「ヲ」各科中高級故參ノ教官ヲ以テ「ニ改ム
- 第十條 學生ノ修學期左ノ如シ
- 戰術科學生ハ概ネ四箇月トシ毎年二回ニ分テ入校セシム
- 射擊科學生ハ步兵ニ在リテハ概ネ四箇月其他ノ兵科ニ在リテハ概ネ二箇月トシ毎年二回ニ分テ入校セシム
- 體操劍術科學生ハ概ネ七箇月トシ毎年一回入校セシム
- 第十一條中「上申」ヲ「移牒」ニ改ム
- 第十七條中「分遣」下士兵卒ハ現役尙一箇年以上ノ期アル下士兵卒中「ヲ」分遣ノ下士ハ現役尙二箇

年以上ノ期アル者兵卒ハ前年十二月入營ノ者中ニ改ム

○陸軍騎兵實施學校條例中改正明治三十三年八月勅令第三百四十六號

朕陸軍騎兵實施學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍騎兵實施學校條例中左ノ通改正ス

第三條但書中「上申」ヲ「移牒」ニ「定ム」ヲ「告達ス」ニ改ム

第六條中但書ヲ削ル

第十三條中「上申」ヲ「移牒」ニ改ム

第十九條中「分遣ノ下士兵卒ハ現役尙二箇年以上ノ期アル下士兵卒中」ヲ「分遣ノ下士ハ現役尙二箇

年以上ノ期アル者兵卒ハ前年十二月入營ノ者中」ニ改ム

○陸軍砲工學校條例中改正明治三十四年二月勅令第三百四十二號

朕陸軍砲工學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍砲工學校條例中左ノ通改正ス

第十四條中「器具」ノ下ニ「消耗品」ヲ「貸與」下ニ「又ハ支給」ヲ加フ

正編下卷四九
二丁參看

正編下卷四九
四丁參看

正編下卷四九
七丁參看

○陸軍野戰砲兵射擊學校條例中改正明治三十三年八月勅令第三百四十號

朕陸軍野戰砲兵射擊學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍野戰砲兵射擊學校條例中左ノ通改正ス

第二條 學生ヲ分テ左ノ二種トス

甲種 各野戰砲兵隊ヨリ分遣スル大中尉學生

乙種 砲工學校卒業ノ上入校スル中少尉學生

第三條但書中「上申」ヲ「移牒」ニ「定ム」ヲ「告達ス」ニ改ム

第六條中但書ヲ削ル

第十條 學生ノ修學期左ノ如シ

甲種學生ハ概ネ三箇月トシ毎年二回ニ分テ入校セシム

乙種學生ハ概ネ二箇月トシ甲種學生ノ修學期中ニ併セテ入校セシム

第十一條中「上申」ヲ「移牒」ニ改メ同條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ砲工學校卒業ノ上直ニ入校スル學生ニ在リテハ教育總監之ヲ命ス

第十七條中「分遣ノ下士兵卒ハ現役尙一箇年以上ノ期アル下士兵卒中」ヲ「分遣ノ下士ハ現役尙二箇

年以上ノ期アル者兵卒ハ前年十二月入營ノ者中」ニ改ム

第二十三號

陸軍騎兵實施學校條例中改正
陸軍砲工學校條例中改正
陸軍野戰砲兵射擊學校條例中改正

○陸軍要塞砲兵射擊學校條例中改正明治三十三年八月
勅令第三百四十八號
朕陸軍要塞砲兵射擊學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍要塞砲兵射擊學校條例中左ノ通改正ス

第二條 學生ヲ分テ左ノ二種トス

甲種 各要塞砲兵隊ヨリ分進スル大中尉學生

乙種 砲工學校卒業ノ上入校スル中少尉學生

第三條但書中「上申」ヲ「移牒」ニ、「定ム」ヲ「告達ス」ニ改ム

第四條中「教導中隊」ヲ「教導大隊」ニ改ム

第五條 本校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長

副官

教官

教導大隊長

教導大隊副官

教導大隊中隊長

教導大隊附

軍 密

軍 吏

准士官、下士、判任文官

第六條中但書ヲ削ル

第九條中「教導中隊ノ中隊長」ヲ「教導大隊ノ大隊長」ニ改ム

第十條 學生ノ修學期左ノ如シ

甲種學生ハ概ネ三箇月トシ毎年二回ニ分テ入校セシム

乙種學生ハ概ネ二箇月トシ毎年一回ニ入校セシム

第十一條中「上申」ヲ「移牒」ニ改メ同條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ砲工學校卒業ノ上直ニ入校スル學生ニ在リテハ教育總監之ヲ命ス

第十三條 學生ハ校外ニ居住セシメ修學ニ所要ノ兵器、彈藥、書籍、器具ハ貸與スルコトヲ得

第十六條中「士官ニ在テハ」及「下士ニ在テハ」考科列序表ヲ製シ「並」又下士ニハ更ニ學術修業ノ證書

ヲ附與シ「ヲ削ル

第十七條 教導大隊ハ分遣ノ下士ハ現役尙二箇年以上ノ期アル者兵卒ハ前年十二月入營ノ者中ヨリ

選拔スヘシ

第十八條中「教導中隊」ヲ「教導大隊」ニ改ム

○海軍省

○要港部條例中改正明治三十四年七月勅令第百四十一號
朕要港部條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
要港部條例中左ノ通改正ス

附則

馬公要港部司令官ハ要港ノ防禦及海岸海面ノ警備ニ關シテハ臺灣總督ノ區域ヲ受クルモノトス
本令ハ明治三十四年七月二十一日ヨリ之ヲ施行ス

○海軍探炭所官制明治三十三年八月勅令第百五十三號

朕海軍探炭所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍探炭所官制

第一條 海軍探炭所ハ之ヲ新原ニ置ク

第二條 海軍探炭所ハ海軍炭山ヲ管轄シ石炭ノ採掘ヲ掌ル所トス

第三條 海軍探炭所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

主計長

前項ノ外技師ヲ置ク

第四條 所長ハ海軍艦政本部長ニ隸シ所務ヲ總理ス

第五條 主計長ハ所長ノ命ヲ承ケ會計給與ニ關スル事ヲ掌リ及庶務ヲ掌理ス

第六條 技師ハ所長ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌理ス

第七條 第三條ニ掲グル職員ノ外書記及助手ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ服務セシム

第八條 海軍探炭所ノ定員ハ別表ニ依ル

附則

新原探炭所官制ハ之ヲ廢止ス

別表

海軍探炭所定員表	
所長	佐官若ハ同相當官
主計長	主計少監、大主計
技師	
	書記
	助手

小計	三人
合計	八人
	五人

○海軍監獄官制中改正明治三十四年九月勅令第百七十六號

朕海軍監獄官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍監獄官制中左ノ通改正ス

第三條中「三人」ヲ「四人」ニ「六人」ヲ「八人」ニ「十人」ヲ「十三人」ニ改ム

第七條中「三十五人」ヲ「四十七人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

正編下卷五三
五丁拾五

○臨時海軍建築部官制明治三十四年七月勅令第百四十七號

朕臨時海軍建築部官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時海軍建築部官制

第一條 臨時海軍建築部ヲ東京ニ置ク(明治三十四年勅令第百七十七號ヲ以テ條中改正)

第二條 臨時海軍建築部ハ海軍大臣ノ監督ニ屬シ左ノ事項ヲ掌ル

- 一 新ニ設置スヘキ鎮守府ニ屬スル建築工事並ニ其ノ計畫及監督
- 二 新ニ設置スヘキ鎮守府ニ屬スル諸機械ノ購買及其ノ据附
- 三 既設鎮守府ニ屬スル建築ノ計畫及其ノ工事ノ監視並ニ其契約ノ審査
- 四 鎮守府所屬ニアラサル建築工事並ニ其ノ計畫及監督

第三條 臨時海軍建築部ニ左ノ職員ヲ置ク

部長
部員
工務監
工務員

第四條 (三十四年勅令第百七十七號ヲ以テ本條別除)

第五條 部長ハ海軍大臣ニ隷シ部務ヲ總理ス

第六條 部員ハ部長ノ命ヲ承ケ服務ス

第七條 工務監ハ部長ノ命ヲ承ケ建築工事ヲ統理ス

第八條 第三條ニ掲クテ工務員ハ部長又ハ工務監ノ命ヲ承ケ服務ス

第九條 (三十四年勅令第百七十七號ヲ以テ本條別除)

第十條 (全上)

第十一條 (全上)
 第十二條 第三條ニ掲クル職員ノ外判任又官ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ服務セシム(三十四年勅令第百七十)七號ヲ以テ本條中改正)
 第十三條 臨時海軍建築部ノ定員ハ別表定ムル所ニ依ル(七十四年勅令第百七十)七號ヲ以テ本條中改正)

(別表)

臨時海軍建築部定員表	
部長	部員
海軍將官	海軍佐官
	海軍大尉
	海軍機關大監
	海軍機關中少監
	海軍軍醫大監
	海軍主計大監
	海軍大主計
	海軍造船大監若ハ造船中少監
	海軍造船大技士
	海軍造兵大監若ハ造兵中少監
	海軍造兵大技士
	海軍造兵大接士
	書記
	書記
	技手
	八
	十三

工務監	技師(勅任)
一	
工務員	技師
四	
小計	十九人
合計	四十人
備考	本表定員ノ外本職アル者ニ兼務ヲ命スルコトヲ得

○海軍將官會議條例(明治二十二年五月勅令第七十五號)
 朕海軍將官會議條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍將官會議條例
 第一條 海軍將官會議ハ東京ニ置キ海軍ニ於ケル重要ノ事項ヲ審議スル所トス(三十四年勅令第百七十)七號ヲ以テ改正)
 第二條 海軍將官會議ハ海軍大臣ヲ以テ議長トシ議員若干人ヲ置キ海軍將官ヲ以テ之ニ補ス(三十二年勅令第百二十七號)ヲ以テ改正)
 第三條 海軍大臣ハ必要ニ依リ職員ニアラサル將官並將官相當官ニ臨時議員ヲ命シ又上長官ヲシテ議事ニ參與セシムルコトヲ得(陸)
 第四條 海軍大臣事故アルトキハ上席將官ヲ以テ議長トス

第五條 議案ハ議長ヨリ下付ス議員ニ於テ議案ヲ提出セントスルトキハ議長ノ許可ヲ受クヘシ
第六條 海軍將官會議ノ事務ハ海軍大臣官房ニ於テ之ヲ處理ス

○海軍大學校條例中改正明治三十三年十一月勅令第四百六號

海軍大學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正編下卷五四
四丁參看

第二十五條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第二十六條 海軍大臣ハ戰時若ハ事變ニ際シ必要ト認ムルトキハ海軍大學校學生ヲ免スルコトヲ得
前項ニ依リ海軍大學校學生ヲ免セラレタル者ニ對シテハ海軍大臣ニ於テ第十五條、第十六條及第十七條ノ規定ヲ適用スルコトナク再ヒ海軍大學校學生ヲ命スルコトヲ得

○海軍軍醫學校條例中改正明治三十三年九月勅令第三百六十八號

海軍軍醫學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正編下卷五五
六丁參看

海軍軍醫學校條例第八條中「書記」ノ下ニ「及技手」ヲ加フ

正編下卷五五
九丁參看

○常設海軍軍法會議ニ於ケル主事録事ノ定員中改正明治三十四年九月勅令第三百七十五號

朕明治三十三年勅令第三百五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年勅令第三百五號中左ノ通改正ス
別表中佐世保鎮守府軍法會議ノ欄ノ下ニ左ノ如ク加フ

海軍鎮守府	軍法會議
三	三

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○司法省

○司法省官制中改正明治三十四年六月勅令第二百二十九號

第二十三條 海軍大學校條例中改正、海軍軍醫學校條例中改正、常設海軍軍法會議ニ於ケル主事録事ノ定員中改正、司法省官制中改正

朕司法省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
司法省官制中左ノ通改正ス
第七條中「二人」ヲ「四人」ニ改ム

○集治監假留監官制中改正明治三十四年九月勅令第百八十號

朕集治監假留監官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
集治監假留監官制中左ノ通改正ス

第七條中「三人」ヲ「二人」ニ改ム

第十一條中「百十八人」ヲ「百六人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○文部省

○高等教育會議規則中改正明治三十四年九月勅令第百八十一號

朕高等教育會議規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等教育會議規則中左ノ通改正ス

第四條第一項ヲ左ノ如ク改ム

高等教育會議ハ左ノ議員ヲ以テ之ヲ組織ス

- 一 學習院長、華族女學校長、皇室博物館總長
- 二 內務省地方局長
- 三 陸軍及海軍教育主任將校各一人
- 四 文部省各局長及視學官二人
- 五 農商務省農務局長及商工局長
- 六 帝國大學總長、法科大學長一人、醫科大學長一人、工科大學長、文科大學長、理科大學長、農科大學長、理工科大學長
- 七 高等師範學校長、女子高等師範學校長、札幌農學校長、高等商業學校長、高等工業學校長一人、高等學校長一人、醫學專門學校長一人、東京外國語學校長、東京美術學校長、東京音樂學校長
- 八 帝國圖書館長
- 九 高等師範學校附屬中學校主事、女子高等師範學校附屬高等女學校主事

十 商船學校長
 十一 道廳府縣視學官二人
 十二 師範學校長二人
 十三 公立中學校長二人
 十四 公立高等女學校長一人
 十五 公立實業學校長三人
 十六 私立學校長四人
 十七 東京學士會院會長
 十八 文部省學校衛生顧問會議議長
 十九 學識アル者又ハ教育事業ニ関歴アル者七人以内
 同條第三項但書中「第十乃至第十二」ヲ「第十二乃至第十四」ト改ム
 第七條ニ左ノ一項ヲ加フ
 任期アル議員ノ補闕議員ハ其ノ前任者ノ殘任期間在任ス
 第十一條但書中「第十三」ヲ「第十五」ニ改ム
 附則
 第十三條ヲ左ノ如ク改ム
 職務上當然議員タル者及第四條第一項第十二乃至第十四ノ議員ヲ除ク外現任議員ハ本令施行ノ日

ヲリ其ノ任ヲ解カレタルモノトス
 第四條第二項第十二ノ現任議員ハ同條同項第十三及第十四ノ現任議員ノ任期満了ノ日マテ在任ス
 ルモノトス
 ○東京帝國大學官制中改正明治三十四年四月勅令第三十四號
 朕東京帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 東京帝國大學官制中左ノ通改正ス
 第七條中「百人」ヲ「百十一人」ニ第八條中「四十二人」ヲ「四十八人」ニ改ム
 ○同明治三十四年五月勅令第四十四號
 朕東京帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 東京帝國大學官制中左ノ通改正ス
 第三條中「一人」ヲ「二人」ニ改ム
 ○
 ○京都帝國大學官制中改正明治三十四年四月勅令第三十五號
 朕京都帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正編下卷五七
七丁參看

朕京都帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
京都帝國大學官制中左ノ通改正ス
第八條中「二十四人」ヲ「二十六人」ニ第九條中「三十七人」ヲ「四十四人」ニ改ム

○同 上明治三十四年六月
勅令第三百三十三號

朕京都帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
京都帝國大學官制中左ノ通改正ス

第八條ニ左ノ二項ヲ加フ

講座ヲ擔任スル助教授ハ前項ノ定員外ニ置クモノトス但シ講座ヲ分擔スル助教授ハ此ノ限ニ在ラ
ス

○文部省直轄諸學校官制中改正明治三十四年三月
勅令第二百四十四號

朕文部省直轄諸學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文部省直轄諸學校官制中左ノ通改正ス
第一條第一項中「第六高等學校」ノ下ニ「第七高等學校造士館山口高等學校千葉醫學專門學校仙臺醫

正編下卷五七
九丁參看

學專門學校岡山醫學專門學校金澤醫學專門學校長崎醫學專門學校」ヲ加ヘ同條第二項ヲ削ル
第十六條 東京盲啞學校ニ教授助教授ヲ置カス教諭及訓導ヲ置ク教諭ハ奏任トシ訓導ハ判任トス
教諭ハ盲啞教員志望者ノ授業ヲ掌リ訓導ハ生徒ノ授業ヲ掌ル

○東京工業學校及大阪工業學校改稱明治三十四年五月
勅令第九十九號

朕東京工業學校及大阪工業學校改稱ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京工業學校ヲ東京高等工業學校ト改稱シ大阪工業學校ヲ大阪高等工業學校ト改稱ス
他ノ法令中東京工業學校トアルハ東京高等工業學校トシ大阪工業學校トアルハ大阪高等工業學校ト
ス

正編下卷五七
九丁參看
及五八八丁參看

○文部省直轄諸學校職員定員中改正明治三十四年三月
勅令第二百五號

朕明治二十六年勅令第八十七號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十六年勅令第八十七號中左ノ通改正ス

第一條中高等師範學校ノ部教授ノ下「四十四人」ヲ「四十七人」ニ女子高等師範學校ノ部教授ノ下「二
十三人」ヲ「二十五人」ニ訓導ノ下「十四人」ヲ「十五人」ニ書記ノ下「七人」ヲ「八人」ニ札幌農學校ノ部

正編下卷五八
二丁參看

第二十三號 京都帝國大學官制中改正 文部省直轄諸學校官制中改正
東京工業學校及大阪工業學校改稱 文部省直轄諸學校職員定員中改正

教授ノ下「十一人」ヲ「十二人」ニ高等商業學校ノ部教授ノ下「十六人」ヲ「二十二人」ニ第一高等學校ノ部教授ノ下「四十八人」ヲ「三十五人」ニ助教ノ下「十六人」ヲ「九人」ニ書記ノ下「十二人」ヲ「八人」ニ第二高等學校ノ部教授ノ下「三十七人」ヲ「二十四人」ニ助教ノ下「十三人」ヲ「五人」ニ書記ノ下「八人」ヲ「六人」ニ第三高等學校ノ部教授ノ下「三十八人」ヲ「二十四人」ニ助教ノ下「二十人」ヲ「七人」ニ書記ノ下「十二人」ヲ「七人」ニ第四高等學校ノ部教授ノ下「三十二人」ヲ「二十一人」ニ助教ノ下「十五人」ヲ「十八人」ニ書記ノ下「八人」ヲ「六人」ニ第五高等學校ノ部教授ノ下「四十六人」ヲ「三十二人」ニ助教ノ下「十九人」ヲ「十二人」ニ書記ノ下「十三人」ヲ「八人」ニ第六高等學校ノ部教授ノ下「七人」ヲ「十三人」ニ助教ノ下「四人」ヲ「五人」ニ書記ノ下「四人」ヲ「五人」ニ山口高等學校ノ部教授ノ下「十四人」ヲ「十八人」ニ助教ノ下「六人」ヲ「三人」ニ東京工業學校ノ部教授ノ下「十七人」ヲ「十九人」ニ書記ノ下「四人」ヲ「五人」ニ東京美術學校ノ部書記ノ下「六人」ヲ「五人」ニ東京音樂學校ノ部助教ノ下「八人」ヲ「九人」ニ大阪工業學校ノ部教授ノ下「十一人」ヲ「十三人」ニ助教ノ下「二十一人」ヲ「二十三人」ニ改メ東京盲啞學校ノ部校長「一人」ノ次ニ教諭「二人」ヲ加フ

第七高等學校造士館

校長 一人
 教授 七人

助教 四人
 書記 四人

同條中山口高等學校ノ次ニ左ノ如ク加フ

千葉醫學專門學校

校長 一人
 教授 十三人
 助教 七人
 書記 五人

仙臺醫學專門學校

校長 一人
 教授 十二人
 助教 六人
 書記 五人

岡山醫學專門學校

校長 一人
 教授 十二人
 助教 七人

書記	五人
金澤醫學專門學校	
校長	一人
教授	十三人
助教授	五人
書記	五人
長崎醫學專門學校	
校長	一人
教授	十三人
助教授	七人
書記	五人
附則	

本令施行ノ際第一高等學校第二高等學校第三高等學校第四高等學校第五高等學校職員中醫學部ニ勤務スル者ニシテ別ニ辭令書ヲ交付セラレサルモノハ現官等ニ相當スル各當該醫學專門學校職員ニ任セラレ現ニ受クル俸給額ニ相當スル俸給ヲ給セララルモノトス

正編下卷五九
一丁參看

同上

○帝國圖書館官制中改正明治三十三年八月勅令第三百二十五號

朕帝國圖書館官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國圖書館官制中左ノ通改正ス

第二條中館長ノ次ニ司書官一人奏任ヲ加ヘ司書ノ下「七人」ヲ「八人」ニ書記ノ下「二人」ヲ「三人」ニ改ム

第四條 司書官ハ館長ノ命ヲ承ク圖書記録及閱覽ニ關スル事務ヲ掌ル

○同明治三十四年三月勅令第二百六號

朕帝國圖書館官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國圖書館官制中左ノ通改正ス

第三條中司書ノ下「八人」ヲ「九人」ニ改ム

○理學文書目錄委員會官制明治三十三年十二月勅令第四百十三號

朕理學文書目錄委員會官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

理官文書目錄委員會官制

第一條 理學文書目錄委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ萬國理學文書目錄委員會ニ關スル事務ヲ管掌

第二條 理學文書目錄委員會ハ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス

一 會長 一人

一 幹事 一人

一 委員 一人

第三條 會長幹事及委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ文部省高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 臨時必要アルトキハ理學文書目錄委員會ニ臨時委員ヲ置クコトヲ得

臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五條 會長ハ一切ノ會務ヲ總理シ萬國理學文書目錄委員會ニ對シ本會ヲ代表ス

第六條 幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌理ス

第七條 委員及臨時委員ハ會長ノ指揮ヲ承ケ理學文書目錄ニ關スル事ヲ掌ル

第八條 會長幹事及委員ハ一箇年二百圓以内臨時委員ハ事ノ輕重ニ應シ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第九條 理學文書目錄委員會ニ書記二人ヲ置キ文部省判任官ヲ以テ之ニ充ツ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ従事ス

書記ニハ一箇年五十圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○農商務省

○農商務省官制中改正 明治三十四年四月勅令第三百三十七號

朕農商務省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第十四條中「四十八人」ヲ「五十人」ニ改ム

正編下卷六〇
三丁卷看

○林區署官制中改正 明治三十三年九月勅令第三百八十七號

朕林區署官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

林區署官制中左ノ通改正ス

第二條ヲ左ノ如ク改ム

正編下卷六〇
六丁卷看

第二條 大林區署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 國有林野ノ保管、利用、處分、測量及境界査定ニ關スル事項
- 二 造林及伐木事業ニ關スル事項
- 三 施業案編製並土地及林野買上ニ關スル事項
- 四 部分林ニ關スル事項
- 五 國有林野及立木竹ノ下戻ニ關スル事項

附則

本令ハ明治三十三年十月十日ヨリ之ヲ施行ス

○同 上明治三十三年十一月
勅令第四百七號

朕林區署官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

林區署官制中左ノ通改正ス

大林區署名稱位置管轄區域表愛媛大林區署ノ管轄區域中「德島縣」ヲ削リ高知大林區署ノ管轄區域中ニ「德島縣」ヲ加フ

○

同

○同 上明治三十四年四月
勅令第三十八號

朕林區署官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

林區署官制中左ノ通改正ス

第六條中「三百十三人」ヲ「三百二十五人」ニ改ム

第八條中「七百三十人」ヲ「七百八十人」ニ改ム

第九條中「六百二十六人」ヲ「六百五十六人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臨時國有林野ノ特別經營ニ關スル職員 明治三十三年九月
勅令第三百八十五號

朕臨時國有林野ノ特別經營ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

國有林野ノ處分、實測、施業案ノ編製、造林及森林買上ニ係ル特別經營ノ爲農商務省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ山林局及大林區署ニ分屬セシム

- | | | |
|---------|-------|----|
| 山林局書記官 | 專任二人 | 奏任 |
| 山林局監督官 | 專任四人 | 奏任 |
| 山林局監督官補 | 專任十六人 | 奏任 |

第二十二號 臨時國有林野ノ特別經營ニ關スル職員

營林技師 專任四十四人(三十四年勅令第三十九號ヲ以テ定員ヲ改正)
山林局書記 專任四百九十五人(上)
營林技手 判任

附則

本令ハ明治三十三年十月十日ヨリ之ヲ施行ス
林野整理局官制ハ之ヲ廢止ス

○臨時林野下戻處分調査ニ關スル職員中改正明治三十四年四月勅令第六十六號

朕明治三十二年勅令第五百十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十二年勅令第五百十一號中左ノ通改正ス

第一條中「山林局技師」ヲ削ル

第二條中「專任三人」ヲ「專任五人」ニ「專任六十九人」ヲ「專任六十六人」ニ改メ「山林局技師」ハ專任二人ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十四年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

正編下卷六〇
九丁參看

正編下卷六一
〇丁參看

正編下卷六一
二丁參看

○鑛山監督署官制中改正明治三十四年四月勅令第四十號

朕鑛山監督署官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鑛山監督署官制中左ノ通改正ス

第四條中「十九人」ヲ「二十四人」ニ改ム

第五條中「百人」ヲ「百三十人」ニ改ム

第六條中「十六人」ヲ「二十一人」ニ改ム

別表中名稱ノ欄「盛岡鑛山監督署」ヲ「仙臺鑛山監督署」ニ位置ノ欄「陸中國盛岡」ヲ「陸前國仙臺」ニ改ム

○製鐵所官制中改正明治三十四年八月勅令第五百十七號

朕製鐵所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

製鐵所官制中左ノ通改正ス

第二條中長官ノ次ニ「書記官專任二人奏任」ヲ加ヘ書記官ノ下「專任五十七人」ヲ「專任六十四人」ニ技手ノ下「專任百七人」ヲ「專任百人」ニ改ム

第四條中「事務官」ヲ「書記官」ニ改メ同條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第四條ノ二事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十二類

臨時林野下戻處分調査ニ關スル職員中改正 鑛山監督署官制中改正 製鐵所官制中改正

正編下卷六一
四丁參看

第十一條中「事務官」ヲ「書記官」ニ改ム

○臨時鐵區調査職員廢止明治三十四年三月勅令第十四號

朕明治三十一年勅令第六十八號廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十一年勅令第六十八號ハ明治三十四年三月三十一日限り之ヲ廢止ス

○肥料ノ分析鑑定ニ關スル職員明治三十四年四月勅令第四十五號

朕肥料ノ分析鑑定ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

肥料ノ分析鑑定ヲ爲サシムル爲農事試驗場ニ專任技手二十人ヲ置ク

○生絲検査所官制中改正明治三十四年四月勅令第二十八號

朕生絲検査所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

生絲検査所官制中左ノ通改正ス

第一條 生絲検査所ニ左ノ職員ヲ置ク
所長

正編下卷六二
四丁参考

正編下卷六二
六丁参考

正編下卷六二
九丁参考

技師 專任七人

技手 專任十七人

書記 專任七人

第六條 削除

○水産講習所官制中改正明治三十四年四月勅令第四十二號

朕水産講習所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

水産講習所官制中左ノ通改正ス

第二條中教授ノ下「專任二人」ヲ「專任三人」ニ技手ノ下「專任八人」ヲ「專任九人」ニ助教ノ下「專任三人」ヲ「專任四人」ニ書記ノ下「專任四人」ヲ「專任五人」ニ改ム

○種馬牧場及種馬所官制中改正明治三十四年四月勅令第四十一號

朕種馬牧場及種馬所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

種馬牧場及種馬所官制中左ノ通改正ス
第十三條中技師ノ下「九人」ヲ「十人」ニ技手ノ下「二十六人」ヲ「二十八人」ニ書記ノ下「十二人」ヲ「十

正編下卷六二
二丁参考

正編下卷六二
三丁参考

第二十三類

臨時鐵區調査職員廢止

肥料ノ分析鑑定ニ關スル職員

生絲検査所官制中改正

水産講習所官制中改正

三人ニ改ム

○肥料礦物調査所官制明治三十四年四月勅令第四十六號

朕肥料礦物調査所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

肥料礦物調査所官制

第一條 肥料礦物調査所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ肥料用礦物ニ關スル調査及試驗ノ事務ヲ掌ル

第二條 肥料礦物調査所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任三人

技手 專任五人

書記 專任二人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理ス

第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

正編下卷六三
○丁巻石

○臨時工場調査ニ關スル職員中改正明治三十四年四月勅令第四十三號

朕明治三十三年勅令第四百九十九號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年勅令第四百九十九號中左ノ通改正ス

書記官ノ次ニ「技師專任一人」ヲ加ヘ「屬」ノ下「二人」ヲ「三人」ニ改ム

○臨時油田調査ニ關スル職員中改正明治三十四年四月勅令第四十四號

朕明治三十三年勅令第二百八十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年勅令第二百八十一號中左ノ通改正ス

技師ノ下「專任二人」ヲ「專任三人」ニ技手ノ下「專任九人」ヲ「專任十四人」ニ屬ノ下「專任一人」ヲ「專任二人」ニ改ム

○漁業法施行準備ニ關スル臨時職員明治三十四年六月勅令第四百三十六號

朕漁業法施行準備ニ關スル臨時職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

漁業法施行準備ニ關スル事務ヲ掌理セシムル爲農商務省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ水産局ニ屬セシム

技師 專任四人

第二十三號 肥料礦物調査所官制 臨時工場調査ニ關スル職員中改正 臨時油田調査ニ關スル職員中改正 漁業法施行準備ニ關スル臨時職員

屬 專任二人
技手 專任六人

○第五回内國勸業博覽會附屬水族館設置明治三十三年十二月勅令第四百一十一號

朕第五回内國勸業博覽會附屬水族館設置ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第五回内國勸業博覽會附屬水族館ハ大阪府堺市大濱通公園内ニ之ヲ設置ス

○臨時博覽會事務局官制廢止明治三十四年五月五月勅令第四百二十三號

朕臨時博覽會事務局官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臨時博覽會事務局官制ハ明治三十四年五月三十一日限り之ヲ廢止ス

○遞信省

○遞信省官制中改正明治三十四年五月勅令第四百號

正編下卷六三
三丁及上卷六三
三丁及上卷六三

正編下卷六三
六丁及上卷六三

朕遞信省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省官制中左ノ通改正ス

第七條ノ二 遞信省ニ鐵道事務官專任二人及鐵道書記專任三人ヲ置キ鐵道局ニ屬セシム

鐵道事務官ハ奏任トス鐵道營業ノ監視ニ關スル事務ヲ掌ル

鐵道書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ鐵道營業ノ監視ニ關スル事務ニ從事ス

第八條中「二十七人」ヲ「三十四人」ニ改ム

第九條中「二百六十九人」ヲ「二百八十三人」ニ改ム

第十條中「七十二人」ヲ「九十二人」ニ改ム

○鐵道作業局官制中改正明治三十四年四月勅令第七十二號

朕鐵道作業局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道作業局官制中左ノ通改正ス

第六條ノ二中「十一人」ヲ「十四人」ニ改ム

第七條中「七十六人」ヲ「八十四人」ニ改ム

第八條中「九百九十九人」ヲ「千百十六人」ニ改ム

第九條中「四百九人」ヲ「四百五十三人」ニ改ム

正編下卷六三
八丁及上卷六三

第二十三類

第五回内國勸業博覽會附屬水族館設置
臨時博覽會事務局官制廢止
遞信省官制中改正
鐵道作業局官制中改正

第十條中「六百八十四人」ヲ「八百二十九人」ニ改ム

○

○官廳用並私設ノ電信電話監督事務ニ關スル件明治三十三年九月勅令第三百六十五號

朕官廳用並私設ノ電信電話監督事務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一等郵便電信局ハ其ノ管轄内ニ於ケル官廳用並私設ノ電信電話ニ關スル監督事務ヲ掌ル

前項ノ事務ニ從事セシムル爲明治三十年勅令第二百七十六號ノ定員内ニ於テ一等郵便電信局ニ通信
按手ヲ置クコトヲ得

附則

本令ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○

○在外國郵便及電信局官吏賜暇規則明治三十四年三月勅令第二十三號

朕在外國郵便及電信局官吏賜暇規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國郵便及電信局官吏賜暇規則

第一條 在外國郵便及電信局官吏ニシテ滿三年以上在勤スル者ニハ往返日數ヲ除キ左ノ割合ニ依リ
賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

一 滿三年以上在勤ノ者ハ三箇月以内

二 滿三年以上滿一年ヲ増ス毎ニ一箇月ヲ加フ但シ通算シテ六箇月ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 賜暇歸朝ノ者ニハ外國旅費規則ニ依リ任地東京間往返旅費ヲ給ス但シ本邦滯留中ノ旅費ハ
之ヲ給セス

前項ノ場合ニ於テ許可ヲ得其ノ妻ヲ同伴スルトキハ船舶料瀛車料又ハ舟車馬賃ニ限リ二倍ヲ給ス

第三條 賜暇歸朝中ハ其ノ俸給ノ全額ヲ給ス
賜暇ノ期限ヲ過キ出發スルコトヲ得サルトキハ其ノ期限ノ翌日ヨリ高等官官等俸給令第十八條ノ
例ニ依リ之ヲ給ス

附則

本令ハ在外公館職員ニシテ在外國郵便及電信局官吏兼任ノ者ニ適用セス

○

○航路標識管理所官制中改正明治三十四年五月勅令第百二號

朕航路標識管理所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

航路標識管理所官制中左ノ通改正ス

第六條中「二十六人」ヲ「三十人」ニ改ム

正編下卷六五
一丁參看

○海軍局官制中改正明治三十四年五月勅令第三百三號
朕海軍局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
海軍局官制中左ノ通改正ス
第四條中書記ノ下「專任三十五人」ヲ「專任四十六人」ニ改ム

正編下卷六五
二丁參看

○海員審判所職員定員及任用令中改正明治三十四年五月勅令第三百十二號
朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ海員審判所職員定員及任用令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
海員審判所職員定員及任用令中左ノ通改正ス
第三條第二項中「十一人」ヲ「十名」ニ改ム
第四條第二項中「二十四名」ヲ「二十二名」ニ改ム

正編下卷六五
八丁參看

○郵便及電信局在外郵便電信局郵便局郵便爲替貯金管理所及電話交換局職員定員中改正明治三十年勅令第二百七十六號
朕明治三十年勅令第二百七十六號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十年勅令第二百七十六號中左ノ通改正ス

第一條中通信事務官ノ下「專任二十六人」ヲ「專任二十九人」ニ通信事務官補ノ下「專任三十一人」ヲ「專任三十五人」ニ通信技師ノ下「專任三十三人」ヲ「專任三十九人」ニ通信書記ノ下「專任三千五百二十三人」ヲ「專任四千三十三人」ニ通信技師ノ下「專任四百二十八人」ヲ「專任五百六十六人」ニ通信書記補ノ下「專任五千二百九十四人」ヲ「專任五千九百三十三人」ニ改ム

正編下卷六五
九丁參看

○商船學校官制中改正明治三十四年五月勅令第三百五號
朕商船學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
商船學校官制中左ノ通改正ス
第二條中「分校長」ヲ削ル
第五條中「十一人」ヲ「十三人」ニ改ム
第七條中「十人」ヲ「十一人」ニ改ム
第八條及第八條ノ二ヲ左ノ如ク改ム
第八條 助教ハ到任トシ專任十人ヲ以テ定員トス教授及教諭ノ職掌ヲ助ク
第九條中「七人」ヲ「九人」ニ改ム
第十條 削除

第二十三類 海軍局官制中改正 海員審判所職員定員及任用令中改正 郵便及電信局在外郵便電信局郵便爲替貯金管理所及電話交換局職員定員中改正 商船學校官制中改正

正編下卷六六
〇丁参看

○東京郵便電信學校官制中改正明治三十四年五月勅令第四百四號
朕東京郵便電信學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京郵便電信學校官制中左ノ通改正ス

第五條中「九人」ヲ「十人」ニ改ム

第七條中「七人」ヲ「十一人」ニ改ム

○遞信省部内ノ官吏戰時若ハ事變ニ際シ所屬部局以外ニ於テ臨時遞信又ハ陸海軍特設ノ事務ニ從事スル者ノ補闕ノ件明治三十四年二月勅令第七號

朕遞信省部内ノ官吏ニシテ戰時若ハ事變ニ際シ所屬部局以外ニ於テ臨時遞信ノ事務ニ從事シ又ハ陸海軍特設ノ事務ニ從事スル者ノ補闕ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省部内ノ官吏ニシテ戰時若ハ事變ニ際シ所屬部局以外ニ於テ臨時遞信ノ事務ニ從事シ又ハ陸海軍特設ノ事務ニ從事スル者ハ之ヲ定員外トシ其ノ補闕ヲ爲スコトヲ得

前項ニ依リ判任官ノ補闕ヲ爲サムトスル場合ニ於テハ雇員ヲ使用シ其ノ俸給ハ判任官俸給豫算定額内ヨリ之ヲ支給スルコトヲ得

附則

明治二十七年勅令第八十三號明治二十八年勅令第二十一號及同年勅令第十六號ハ之ヲ廢止ス

○行政裁判所

○行政裁判所處務規定中改正明治三十四年四月勅令第七十三號

正編下卷六七
二丁参看

朕行政裁判所處務規定中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判所處務規程中左ノ通改正ス

第一條 行政裁判所部長故障アルトキハ其部ノ評定官行政裁判法第七條第二項ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

行政裁判所評定官故障アルトキノ代理順序ハ行政裁判所長官之ヲ定ム

第二條 部長ハ一事件毎ニ審判準備ノ爲メ其部ノ評定官中ノ一名若ハ二名ニ專理員ヲ指命スルコトヲ得

專理員ハ合議ノ際先ツ事實、證據及爭點ニ付説明ヲ爲スヘシ

第三條 判決ハ審問終結シタル期日又ハ其期日ヨリ十四日以内ニ之ヲ言渡スヘシ

第七條ノ二 法規ノ解釋ニ付判例ヲ變更セムトスルトキ又ハ法規ノ解釋ヲ一定スルノ必要アルトキ

第二十三類 東京郵便電信學校官制中改正 遞信省部内ノ官吏戰時若ハ事變ニ際シ所屬部局以外ニ於テ臨時遞信又ハ陸海軍特設ノ事務ニ從事スル者ノ補闕ノ件 行政裁判所處務規程中改正

ハ長官ハ之ヲ總會議ノ議ニ付ス

附則

本令ハ明治三十四年五月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○行政裁判法第八條第二項ニ依ル組織及事務分配方明治三十四年四月勅令第七十二號

行政裁判法第八條第二項ニ依ル組織及事務分配ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 行政裁判所ニ第一第二ノ二部ヲ置ク

第二條 行政裁判所ニ部長二人ヲ置ク

部長一人ハ勅任評定官中ヨリ之ヲ命ス

第三條 長官ハ一ノ部ニ長タルヘシ

長官ハ毎年部長並評定官ノ部屬ヲ定ム

第四條 長官ハ各部ニ屬スヘキ事務ノ分配ヲ定ム

部長ハ部内ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十四年五月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○警視廳

正編下卷一六
六丁參看

正編下卷六七
四丁參看

○警視廳官制中改正明治三十三年九月勅令第三百八十一號

朕警視廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警視廳官制中左ノ通改正ス

第一條中「消防機關士」ノ次ニ「通譯」ヲ加フ

第三條中「二十五人」ヲ「二十七人」ニ改ム

第五條中「技手」ノ下ニ「及通譯」ヲ加ヘ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

通譯ハ判任トス

第十三條 警視總監事故アルトキハ上席警視其ノ職務ヲ代理ス

警視總監ハ警視廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十三條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ

第十三條ノ二 警視總監ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ島司ニ委任スルコトヲ得

第十三條ノ三 警視總監ハ島司ノ處分若ハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ職權ヲ犯スモノアリト

認ムルトキハ其ノ處分若ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第十五條第四項中「警視」屬ノ下ニ「通譯」ヲ加フ

第二十五條中「消防署長」ノ下ニ「第一部長又ハ」ヲ加フ

第三十二條中「又ハ警部」ヲ削ル

○

上明治三十四年五月
勅令第百六號

朕警視廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
警視廳官制中左ノ通改正ス

第四條第二項中「三百六十人」ヲ「三百六十二人」ニ改ム

○北海道廳

○

上明治三十四年四月
勅令第百四十七號

朕北海道廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳官制中左ノ通改正ス

第三條中「二人」ヲ「三人」ニ「内務部長及殖民部長」ヲ「内務部長、殖民部長及土木部長」ニ改ム

第七條中「十八」ヲ「十二人」ニ改ム

正編下卷六八
四丁參看

同
上

第八條中「四百九十二人」ヲ「五百二十二」ニ改ム

第九條中「八十三人」ヲ「百十五人」ニ改ム

第十九條中「三部」ヲ「四部」ニ改メ「殖民部」ノ次ニ「土木部」ヲ加フ

第二十條中第一號第二號ヲ左ノ如ク改メ第九號及第十號ヲ削ル

一 支廳、戶長役場、郡町村總代人及區町村其ノ他公共組合ニ關スル事項

二 議員選舉、北海道會及北海道地方費ニ關スル事項

第二十二條 土木部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 土木ニ關スル事項

二 水面埋立ニ關スル事項

○

上明治三十四年五月
勅令第百九十七號

朕北海道廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳官制中左ノ通改正ス

第九條ノ二 前各條ノ定員ノ外農事試驗ニ關スル職員ヲ置キ其ノ定員ハ專任技師三人、技手二人及

屬一人トス

○北海道鐵道部官制中改正明治三十三年八月
勅令第三百二十三號

朕北海道鐵道部官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道鐵道部官制中左ノ通改正ス

第二條中「專任一人」ヲ「專任二人」ニ「專任九人」ヲ「專任十人」ニ「專任八十一人」ヲ「專任百八人」ニ

「專任六十八人」ヲ「專任六十三人」ニ改ム

第七條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第八條 北海道廳長官ハ內務大臣ノ許可ヲ經テ必要ノ地ニ鐵道業務ヲ取扱フ爲支所ヲ置キ鐵道部ノ

業務ヲ分掌セシムルコトヲ得

○同 上明治三十四年六月
勅令第三百二十六號

朕北海道鐵道部官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道鐵道部官制中左ノ通改正ス

第二條中「專任十人」ヲ「專任十二人」ニ「專任百八人」ヲ「專任百二十八人」ニ「專任六十三人」ヲ「專任

八十一人」ニ改ム

○北海道廳府縣恩給顧問醫々術上事項審査方明治三十三年六月
勅令第三百二十九號

朕北海道廳府縣恩給顧問醫ノ醫術上事項審査ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳府縣恩給顧問醫ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ公立學校職員ノ進退ニ關シ醫術上ノ事項ヲ審

査ス

○府縣

○漁業法施行準備ニ關スル府縣臨時職員明治三十四年六月
勅令第三百三十七號

朕漁業法施行準備ニ關スル府縣臨時職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣知事ハ漁業法施行準備ニ關スル事務ヲ掌理セシムル爲漁業法施行準備費豫算定額内ニ於テ臨時

屬及助手ヲ置クコトヲ得

前項職員ノ定員ハ各府縣ヲ通シテ五十五人トシ其ノ配置ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十三號

北海道鐵道部官制中改正 北海道廳府縣恩給顧問醫々術上事項審査方
漁業法施行準備ニ關スル府縣臨時職員

二十九年內務省令第二號ヲ以テ全行一日ヨリ施行

○沖繩縣郡區職員及島廳職員ニ關スル件明治二十九年三月勅令第十四號
 朕沖繩縣郡區職員及島廳職員ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 沖繩縣島尻中頭國頭ノ各郡ニ郡長一人及郡書記若干人ヲ置ク

第二條 沖繩縣宮古八重山ノ各郡ニ島司一人及島廳書記若干人ヲ置ク

第三條 沖繩縣那覇首里ノ各區ニ區長及區書記若干人ヲ置キ那覇區長ハ島尻郡長ヲ以テ之ニ充テ首里區長ハ中頭郡長ヲ以テ之ニ充テ

第四條 地方官官制中郡長ニ關スル規程ハ區長ニ適用シ郡書記ニ關スル規程ハ區書記ニ適用ス

第五條 沖繩縣郡區書記ノ定員ハ沖繩縣判任官ノ定員内ニ於テ知事之ヲ定ム

附則

第六條 本令施行ノ時期ハ內務大臣之ヲ定ム

○沖繩縣間切島吏員規程明治三十年三月勅令第五十六號
 朕沖繩縣間切島吏員規程ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

沖繩縣間切島吏員規程

第一章 間切吏員ノ組織及任免

第一條 間切ニ間切長一名書記若干名ヲ置ク書記ノ定員ハ沖繩縣知事之ヲ定ム

第二條 間切ニ收入役一名ヲ置ク但シ場合ニ依リ沖繩縣知事ハ書記ヲシテ收入役ヲ兼務セシムルコトヲ得

郡長島司ハ收入役ヲシテ身元保證トシテ金圓若干ハ物件ヲ間切ニ差出サシムルコトヲ得

第三條 間切内ノ村ニ村頭一名ヲ置ク但シ沖繩縣知事ニ於テ必要ト認ムルトキハ數村ニ一名ノ村頭ヲ置キ又ハ村ニ村頭ヲ置カサルコトヲ得

第四條 間切長收入役書記村頭ハ沖繩縣知事之ヲ任免ス

第五條 郡長島司ハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ間切又ハ間切内ノ村ニ必要ノ附屬員ヲ置クコトヲ得

附屬員ハ郡長島司之ヲ任免ス

第六條 郡長島司ニ於テ必要ト認ムルトキハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ間切ニ臨時若クハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得

委員ハ郡長島司之ヲ任免ス

第七條 沖繩縣知事ニ於テ必要ト認ムルトキハ內務大臣ノ許可ヲ得テ數間切ニ一名ノ間切長及其ノ他ノ間切吏員ヲ置クコトヲ得

第二章 間切吏員ノ職務權限

第八條 間切長ハ上司ノ指揮監督ヲ承ケ間切ヲ統轄シ法律命令若クハ慣例ニ依リ其ノ行政事務ヲ擔任ス

間切長ノ擔任スル事務ノ概目ハ內務大臣ノ許可ヲ得テ沖繩縣知事之ヲ定ム

第九條 書記ハ間切長ノ命令ヲ承テ庶務ニ從事ス

間切長故障アルトキハ上席書記其ノ職務ヲ代理ス

第十條 收入役ハ間切ノ收入ヲ受領シ其ノ費用ノ支拂ヲ爲シ其ノ他會計事務ヲ掌ル

第十一條 村頭ハ間切長ノ命令ヲ承ケ村内ニ關スル間切長ノ事務ヲ補助執行ス
間切長ハ郡長ノ許可ヲ得テ村内ニ關スル其ノ事務ノ一部ヲ村頭ニ委任スルコトヲ得

第十二條 附屬員ハ間切長又ハ村頭ニ屬シ其ノ命令ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十三條 委員ハ間切長ノ指揮監督ヲ承ケ其ノ事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ一時ノ委託ニ依リ事務ヲ處
辨ス

委員ノ職務權限ニ關スル細則ハ郡長島司之ヲ定ム

第十四條 間切吏員ノ處務規程ハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ郡長島司之ヲ定ム

第十五條 間切吏員ニハ官吏服務紀律及官吏懲戒令ヲ準用ス

間切長收入役書記村頭ノ懲戒處分ハ沖繩縣知事之ヲ行ヒ其ノ他ノ吏員ノ懲戒處分ハ郡長島司之ヲ
行フ

第三章 給料及給與

第十六條 間切長收入役書記村頭ノ給料額旅費額及其ノ支給方法ハ沖繩縣知事之ヲ定ム

第十七條 委員ニハ給料ヲ給セズ但シ郡長島司ハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ報酬及旅費ヲ給スルコト

ヲ得

前項ノ報酬額旅費額及其ノ支給方法ハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ郡長島司之ヲ定ム

第十八條 附屬員ノ給料額旅費額及其ノ支給方法ハ沖繩縣知事ノ許可ヲ得テ郡長島司之ヲ定ム

第十九條 沖繩縣知事ハ有給吏員ノ退職料及遺族扶助料ニ關スル規程ヲ設クルコトヲ得

第二十條 給料旅費退職料遺族扶助料及報酬ハ間切ノ負擔トス但シ從來ノ地役人諸給額ハ當分國庫
ヨリ其ノ間切ニ支給ス

第四章 島吏員

第二十一條 島尻郡粟島渡名喜島伊平屋島島及國頭郡伊江島ノ各島ニ島長一名及收入役書記ヲ
置キ其ノ他附屬員委員ヲ置クコトヲ得

前項各島内ノ村ニ村頭附屬員ヲ置クコトヲ得

島長ニ關シテハ間切長ニ關スル規程ヲ準用シ其ノ他ノ吏員ニ關シテハ間切吏員ニ關スル規程ヲ準
用ス

第五章 宮古郡八重山郡ニ關スル特例

第二十二條 宮古郡八重山郡ニ於テハ各郡ノ區域ヲ以テ一間切ト見做ス

八重山郡與那國島ハ一村ト見做ス

第二十三條 間切ニ間切長書記ヲ置カス間切長ノ職務ハ島司之ヲ行ヒ書記ノ職務ハ島廳書記之ヲ行

島司ハ村内ニ關スル間切事務ノ一部ヲ村頭ニ委任スルコトヲ得
第二十四條 收入役ハ島廳書記ノ中ニ就キ沖繩縣知事之ヲ命ス

附則

第二十五條 此ノ勅令ニ規程アルモノヲ除ク外間切島吏員ニ關シ必要ナル事項ハ内務大臣之ヲ定ム
第二十六條 此ノ勅令ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

○地方森林會規則中改正明治三十三年十一月
勅令第四百一號

朕地方森林會規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

地方森林會規則中左ノ通改正ス

第五條第三項中「選定」ヲ「命」ニ改ム

第八條 議長ハ府縣知事ヲ以テ之ニ充ツ議長事故アルトキハ府縣知事ノ指名シタル府縣高等官之ヲ代理ス

議員ハ左ニ掲ケル者ニ就キ農商務大臣之ヲ命ス

- 一 府縣高等官
- 二 土木監督署高等官
- 三 鑛山監督署高等官

正編下卷七二
六丁季石

四 大森區署高等官

五 御料地所在ノ府縣ニ在リテハ御料局高等官

六 府縣名譽職參事會員中ヨリ互選シタル者

七 森林事業ニ經驗アル者

八 治水、土木又ハ鑛山事業ニ經驗アル者

前項ニ掲ケタル者ノ外地方ノ狀況ニ依リ農業又ハ水産事業ニ經驗アル者ヲ議員ニ命スルコトヲ得

第九條 官吏ニシテ議員タル者ノ外議員ノ任期ハ二年トス但シ府縣名譽職參事會員ノ互選ニ係ル者

ノ任期ハ府縣名譽職參事會員ノ任期ニ依ル

補闕議員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

○

○府社縣社以下神社ノ神職ニ關スル規定中改正明治三十三年十一月
勅令第三百九十八號

朕明治二十七年勅令第二十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十七年勅令第二十二號第六條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ氏子(信徒)總代ニ於テ候補者ヲ推薦セサルカ若ハ推薦再回ニ及フモ候補者其ノ任ニ適セスト
認メタルトキハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ適任者ヲ舉ケテ其ノ職ニ補スヘシ

正編下卷七二
〇丁季石

○第二十四類 官等、俸給、旅費

○高等官官等俸給令中改正明治三十三年八月勅令第三百二十七號

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條中各省ノ部「帝國圖書館長」ヲ削ル

文武高等官等表中文部省ノ部四等乃至八等ノ欄「帝國圖書館長」ヲ削ル

高等文官官等相當俸給表中「帝國圖書館長」ヲ削リ海軍監獄長ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

帝國圖書館長	一級俸	二級俸	三級俸	四級俸	五級俸	六級俸	七級俸	一級俸	二級俸	三級俸	四級俸	五級俸	六級俸
司書官													

○同

上明治三十三年八月勅令第三百二十八號

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第二十四類 高等官官等俸給令中改正

正編下卷七三
○丁參看

同

上

文武高等官等表中内務省ノ部五等乃至七等ノ欄「集治監典獄」及六等乃至八等ノ欄「集治監分監長」ヲ削リ司法省ノ部五等乃至八等ノ欄ニ左ノ如ク加フ

集治監典獄	同	上	同	上	上
集治監分監長	同	同	同	上	同
				上	同

○同 上明治三十三年九月勅令第三百八十六號

朕高等官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

林野整理局書記官ヲ山林局書記官ニ林野整理局監督官ヲ山林局監督官ニ林野整理局監督官補ヲ山林局監督官補ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年十月十日ヨリ之ヲ施行ス

○同 上明治三十四年八月勅令第五百十八號

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

同

上

第九條中山林局書記官ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

製鐵所書記官

文武高等官官等表中農商務省ノ部三等乃至七等ノ欄山林局書記官ノ次ニ「製鐵所書記官」ヲ加フ
高等文官官等相當俸給表中「山林局書記官」ノ次ニ「製鐵所書記官」ヲ加フ

○文武判任官等級表中改正 明治三十三年九月勅令第三百八十二號

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文武判任官等級表中左ノ通改正ス

文武判任官等級表中消防機關士ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

一等	二等	三等	四等	五等
警視廳通譯	同	上同	上同	上同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同

○在外公館職員官等令中改正 明治三十四年十月勅令第三百八十九號

第二十四類 高等官官等俸給令中改正 文武判任官等級表中改正 在外公館職員官等令中改正 二百六十一

朕在外公館職員官等令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
在外公館職員官等令中左ノ通改正ス
第一條第二項ヲ左ノ如ク改ム

總領事ニシテ滿三年以上高等官三等ニ在リ又ハ領事、貿易事務官ニシテ滿三年以上高等官四等ニ在リ特ニ功績アル者ニ限リ總領事ニ在リテハ高等官二等ニ領事、貿易事務官ニ在リテハ高等官三等ニ陞叙スルコトヲ得

○ 公使館領事館費用條例中改正明治三十三年十二月勅令第四百十二號

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

公使館領事館費用條例別表第二號中「メコマ」ヲ「シヤトル」ニ改ム

○ 同 上明治三十四年六月勅令第百二十五號

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

別表第二號ニ左ノ二項ヲ加フ

オ デ ッ サ	六,000	三,200 以下	二,800 以下	四,100
モ ン ト リ ー ル	六,800	三,500 以下	二,700 以下	四,100

○ 同 上明治三十四年十月勅令第百九十號

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

第二條中同五等以下ノ欄ヲ左ノ如ク改メ其ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

同 五 等	同 六 等	同 七 等
公使館二等書記官 領 事 貿易事務官	公使館三等書記官 領 事 貿易事務官	公使館三等書記官 領 事 貿易事務官 副 領 事 副 貿易事務官 外 交 官 領 事 官 補 補 事

一級	千八百圓	一級	千四百圓	一級	千
二級	千六百圓	二級	千二百圓	二級	九百圓
三級	千四百圓	三級	千	三級	八百圓
			四	四級	七百圓
				五級	六百圓

總領事ニシテ高等官ニ等ニ陞叙セラレタル者ノ俸給ハ二千五百圓、領事及貿易事務官ニシテ高等官三等ニ陞叙セラレタル者ノ俸給ハ二千二百圓トス

○海軍軍人俸給令中改正明治三十四年五月勅令第百七號

朕海軍軍人俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍軍人俸給令第四表中大佐及相當官ノ欄「艦隊主計長」ノ次ニ「機關長」ヲ加ヘ少將ノ欄「艦隊司令長官」ヲ中佐及相當官ノ欄「艦隊航海長」「艦隊機關長」「艦隊軍醫長」「艦隊主計長」ヲ大尉及相當官ノ欄「艦隊副官」ヲ削ル

○同明治三十四年七月勅令第百四十四號

正編下卷七八
六丁卷右

同
上

朕海軍軍人俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍軍人俸給令中左ノ通改正ス

第六條ニ左ノ一項ヲ加フ

學校、練習所及海兵團所屬ノ練習艦艇ノ定員ニハ該艦艇定碇港ニ碇泊中ハ臨時他ノ役務ニ服スル場合ノ外航海加俸ヲ給セス

第二十三條ニ左ノ一項ヲ加フ

加俸及下士卒ノ俸給ハ每月下旬之ヲ支給ス

第六表末欄中「艦長」ヲ「艦艇長」ニ改ム

○海軍生徒學生手當金規則中改正明治三十四年八月勅令第百六十二號

朕海軍生徒學生手當金規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍生徒學生手當金規則中左ノ通改正ス

第一條第一項中但書ヲ削ル

第二條中「在艦」及但書ヲ削ル

第三條中「在艦」ヲ削ル

正編下卷七九
七丁卷右

○艦船乗員ノ俸給及糧食料前渡方ノ件中改正明治三十四年九月
朕明治二十三年勅令第五百十號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十三年勅令第五百十號中左ノ通改正ス
第二項ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○海軍特設船舶定員ノ航海加俸明治三十三年七月
朕海軍特設船舶定員ノ航海加俸ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
海軍運送船、通信船、病院船及工作船ノ定員ニハ左表ノ航海加俸ヲ給ス

大官 相當官佐	官別 職別	加俸日當額		加俸日當額		加給額
		本邦沿岸	支那、朝鮮、 亞細亞、露領、 亞細亞、露領、 沿岸	東經九十度 以西、北緯 三十四度 以南	東經九十度 以西、北緯 三十四度 以南	
軍醫長	一	五圓	二圓	三圓	四圓	十圓

備考	大尉及 相當官		少佐及 相當官		中官佐 相當官	
	主計長	監督官	軍醫長	工作長	監督官	工作長
本表ニ記載セサル職員ノ航海加俸支給額ハ海軍軍人俸給令中第五表ニ依ル	軍醫長	四十錢	二十錢	八十錢	一圓二十錢	一圓六十錢
	主計長	四十五錢	二十三錢	九十錢	一圓三十五錢	一圓八十錢
	監督官	五十錢	二十五錢	一圓	一圓五十錢	二圓
	工作長	六十五錢	三十三錢	一圓三十錢	一圓九十五錢	二圓六十錢
	監督官	三十三錢	一圓三十錢	一圓九十五錢	二圓六十錢	

○交通至難ノ島嶼ニ在勤ノ判事檢事裁判所書記雇員ニ手當給與ノ規定中改正明治三十四年五月
朕明治二十三年勅令第七十七號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十三年勅令第七十七號中左ノ通改正ス
明治二十三年勅令第七十七號中「裁判所及檢事局並區裁判所出張所」ヲ「裁判所、檢事局、區裁判所出

第二十四類

艦船乗員ノ俸給及糧食料前渡方ノ件中改正海軍特設船舶定員ノ航海加俸
交通至難ノ島嶼ニ在勤ノ判事檢事裁判所書記雇員ニ手當給與ノ規定中改正

張所及監獄ニ改メ裁判所書記ノ下ニ監獄書記、看守長、看守ヲ加フ
別表中裁判所書記ノ次ニ左ノ如ク加フ

監督書記	六圓	以內
看守長	六圓	以內
看守	五圓	以內

○帝國大學高等官等俸給令中改正明治三十四年五月勅令第百十五號

朕帝國大學高等官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學高等官等俸給令中左ノ通改正ス
第一條第三項中「專任」ヲ削ル

○帝國圖書館高等官等俸給令明治三十三年八月勅令第百二十六號

朕帝國圖書館高等官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正編下卷八
七丁參看

正編下卷八
七丁參看

帝國圖書館高等官等俸給令

第一條 帝國圖書館長ハ高等官三等以下六等以上トシ司書官ハ高等官六等以下八等以上トス

第二條 館長及司書官ノ年俸ハ別表ニ依ル

(別表)

官職	給	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級
館長	長	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓
司書	官	千二百圓	千圓	四百九圓	四百八圓	四百七圓	四百六圓	四百四圓

○府縣郡農事試驗場水産試驗場農事講習所職員並農事巡廻教師林業巡廻教師水産巡廻教師ノ名稱待遇任免及官等等級配當中改正明治三十四年八月勅令第百五十九號

朕明治三十一年勅令第三百四十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十一年勅令第三百四十八號中左ノ通改正ス

「府縣」ノ上ニ「道廳」ヲ「府縣稅」ノ上ニ「北海道地方費」ヲ「府縣知事」ノ上ニ「北海道廳長官」ヲ加フ

第一條中「水産講習所」ノ下ニ「種畜場」ヲ加フ

第二條中「農事試驗場」ノ下「及」ヲ削リ「水産試驗場」ノ下ニ「及種畜場」ヲ加フ

第四條第七條及別表中「農事講習所」ノ下「及」ヲ削リ「水産講習所」ノ下ニ「及種畜場」ヲ加フ

第二十四號 帝國大學高等官等俸給令中改正 帝國圖書館高等官等俸給令 府縣郡農事試驗場水産試驗場農事講習所職員並農事巡廻教師林業巡廻教師水産巡廻教師ノ名稱待遇任免及官等等級配當中改正

正編下卷八
一丁參看

○在外國郵便及電信局官吏手當給與規則明治三十四年三月
勅令第二百二十二號

朕在外國郵便及電信局官吏手當給與規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國郵便及電信局官吏手當給與規則

第一條 在外國郵便及電信局官吏手當ハ在勤手當、加給手當、一時手當ノ三種トス

第二條 在勤手當ハ在外國郵便及電信局ニ在勤スル者ニ之ヲ給ス

加給手當ハ遞信大臣ノ認許ヲ得テ妻ヲ任地ニ在留セシムル者ニ之ヲ給ス

一時手當ハ外國ノ甲地ヨリ乙地ニ轉任、轉勤ヲ命シ又ハ歸朝ヲ命シタル者及在勤中若ハ任地往返

中死亡シタル者ニ之ヲ給ス

第三條 在勤手當加給手當及一時手當額ハ別表定ムル所ニ依ル但シ死亡ノ場合ニ於ケル一時手當額

ハ最終ニ受ケタル在勤手當年額ノ十分ノ三トス

第四條 他ノ官廳ヨリ兼任ノ者ニハ加給手當一時手當ヲ給セス在勤手當ニ限リ其ノ三分ノ一以內ヲ

給スルコトヲ得

第五條 本令手當ノ給與ニ關スル細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

附則

明治二十四年勅令第六十七號ハ之ヲ廢止ス

三十四年三月
省令第十九號
ヲ以テ給與細
則ヲ定ム
三十四年三月
省令第三十八
號ヲ以テ給與
細則中改正
正編下卷八三
九丁參看

(別表)

官名	在勤手當年額	加給手當年額	一時手當額
局長	千五百圓以內	三百七十五圓以內	二百圓以內
書記	八百圓以內	二百圓以內	百二十圓以內
書記補	六百圓以內	百五十圓以內	九十圓以內

○航路標識視察船及海底電線布設船乘組員ニ食卓料及航海日當支給ノ件中改正明治三十四年九月
勅令第二百九號

朕明治三十一年勅令第一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十一年勅令第一號中左ノ通改正ス

第一條中航路標識視察船ノ下ニ「商船學校所屬航海練習船」ヲ加フ

○在清國帝國領事館附「船舶司檢所」職員月手當明治三十一年九月
勅令第二百九號

朕在清國帝國領事館附船舶司檢所職員月手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在清國帝國領事館附「命ヒラレタル」船舶司檢所「職員」ニハ遞信大臣別表ニ依リ月手當ヲ支給ス

正編下卷八四
〇丁參看

第二十四號

在外國郵便及電信局官吏手當給與規則
航路標識視察船及海底電線布設船乘組員ニ食卓料及航海日當支給ノ件中改正
在清國帝國領事館附船舶司檢所職員月手當

第三十二年勅令
第三百六十三號
第三十一年勅令
第三百七十七號
省令第十七號
ヲ以テ給與細則ヲ定ム

三十三年農商
事務第二十號
ヲ以テ給與細則ヲ定ム

(別表)

官	名	月手當金額
「司	檢官	七十圓以內
「司	檢官補	六十圓以內
技書	手記	五十圓以內

○清國駐在製鐵所職員月手當支給方明治三十三年九月勅令第三百八十八號

朕清國駐在製鐵所職員月手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
鐵鑛購入ノ爲清國ニ駐在ヲ命セラレタル製鐵所職員ニハ農商務大臣別表ニ依リ月手當ヲ支給ス

(別表)

官	名	月手當金額
高等	官	七十五圓以內
判任	官	四十圓以內

正編下卷八四
九丁參看

○巡查看守俸給令中改正明治三十四年四月勅令第五十七號

朕巡查看守俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查看守俸給令中左ノ通改正ス

第一條 巡查看守ノ月俸ハ巡查部長看守部長ニ在リテハ別表甲號其ノ他ノ巡查看守ニ在リテハ別表乙號ニ依ル

第二條 第一項中「五級」ヲ「別表乙號五級俸」ニ第二項中「四級俸」ヲ「別表乙號四級俸」ニ改メ第三項ヲ左ノ如ク改ム

前項ノ場合ニ於テ其ノ前職ノ月俸額別表乙號三級俸以上ニ相當スルトキハ別表甲號乙號ノ範圍内ニ於テ前職ノ月俸額ニ相當スル月俸迄ヲ給スルコトヲ得

第三條 巡查看守ニシテ別表乙號四級俸以上ノ月俸ヲ受クル者ハ六箇月ヲ經過スルニ非サレハ昇級スルコトヲ得ス但シ巡查部長看守部長ニ振擢セラレ又ハ巡查部長看守部長ノ昇級スル場合ニ於テ別表甲號五級俸以下ヲ給スルハ此ノ限ニ在ラス

第三條ノ二 巡查部長看守部長ニハ當分ノ内月俸十四圓ヲ給スルコトヲ得

(別表)

甲 號

一級	二級	三級	四級	五級	六級
二十五圓	二十二圓	二十圓	十八圓	十六圓	十五圓
乙 號					
一級	二級	三級	四級	五級	六級
十五圓	十四圓	十三圓	十二圓	十一圓	十圓
					九圓
					八圓

○ 巡查給與品及貸與品規則 明治三十年九月勅令第三百三十九號

朕巡查給與品及貸與品規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查給與品及貸與品規則

第一條 巡查ニ給與スヘキ品目左ノ如シ

- 一 帽
- 一 冬 服
- 一 夏 服
- 一 甲種 外套
- 一 乙種 外套

一 日 履	一 下 襟	一 手 套	一 冬 肌	一 夏 肌	一 靴 下	一 長 靴	一 短 靴	第二條 巡查ニ貸與スヘキ品目左ノ如シ	一 帽 章	一 肩 章	一 劍 緒	一 劍 帶	一 外 套 及 被 服 ノ 卸	一 外 套 締 革	一 手 帖	一 指 細
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------------------	-------	-------	-------	-------	-----------------	-----------	-------	-------

一呼子 笛

第三條 給與品ハ現品ヲ以テスヘシ但シ下襟手套冬肌著夏肌著靴下長靴短靴ハ代料ヲ以テ下付スルコトヲ得

制服ノ着用ヲ要セサル特別ノ勤務ニ服スル巡査ニハ任命ノ際前項ノ規程ニ依リ給與シ其ノ後ハ總テ代料ヲ以テ下付スルコトヲ得

第四條 給與品ノ員數及使用期限ハ左ノ如シ但シ已ムヲ得サル事情アルトキハ内務大臣ノ認可ヲ得テ員數ヲ増減シ及使用期限ヲ伸縮スルコトヲ得

- 一 帽 一 筒 十二箇月
- 一 冬 服 一 組 二十四箇月
- 一 夏 服 二 組 四 箇月
- 一 甲 種 外 套 一 著 二十四箇月
- 一 乙 種 外 套 一 著 二十四箇月
- 一 日 褌 一 箇 四 箇月
- 一 下 襟 四 箇 四 箇月
- 一 手 套 二 箇 六 箇月
- 一 冬 肌 著 二 組 八 箇月
- 一 夏 肌 著 二 組 四 箇月

- 一 靴 下 二 足 一 箇月
- 一 長 靴 一 足 十二箇月
- 一 短 靴 二 足 十二箇月

前項使用期限ノ外廳府縣長官ハ保存期限ヲ定ムルコトヲ得

第五條 貸與品ハ退職休職轉職死亡ノ際之ヲ返納スヘシ使用期限ノ終ラサル給與品亦同シ但シ給與品ノ代料ヲ以テ下付シタルモノハ使用殘期ニ相當スル金額ヲ返納スヘシ

第六條 貸與品又ハ使用期限ノ終ラサル給與品ヲ毀損紛失シ代品ヲ交付スル場合ニ於テ其ノ毀損紛失過失怠慢ニ出タルモノナルトキハ辨償ノ責ニ任スヘシ

附 則

第七條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス但シ本令施行ノ際既に給與シタル現品ニハ之ヲ適用セス

○ 看守給與品及貸與品規則(明治三十一年十一月)

看守給與品及貸與品規則(明治三十一年十一月)

看守給與品及貸與品規則

第一條 看守ニ給與スヘキ品目左ノ如シ

- 一冬 服
 - 一夏 服
 - 一甲種外套(兩履付)
 - 一乙種外套(肩世)
 - 一帽
 - 一日 履
 - 一長 靴
 - 一短 靴
 - 一下 襟(色)
 - 一手 套(色)
 - 一靴 下
 - 一襦袢 袴 下
- 第二條 看守ニ貸與スヘキ品目左ノ如シ
- 一刀
 - 一常 緒
 - 一刀 帶
 - 一帽 章

- 一肩 章
 - 一外套 締草
 - 一手 帖
 - 一拵 繩
 - 一呼子 笛
- 第三條 給與品ハ現品ヲ以テ給ス其ノ供用期限ハ左ノ如ク之ヲ定ム但シ已ラ得サル事情アルトキハ内務大臣ノ認可ヲ經テ本條ノ供用期限ヲ變更スルコトヲ得
- 一冬 服 二組 三年
 - 一夏 服 二組 四年
 - 一甲種外套(兩履付) 一箇 二年
 - 一乙種外套 一箇(肩世) 二年
 - 一帽 一箇 一年
 - 一日 履 一箇 四年
 - 一長 靴 一組 一年
 - 一短 靴 二組 一年
 - 一下 襟 二箇 二年

- 一手 套 二組 六箇月
- 一靴 下 二組 一箇月
- 一冬襦袢袴下 二組 八箇月
- 一夏襦袢袴下 二組 四箇月

第四條 長靴、短靴、下襟、手套、靴下、襦袢、袴下ニ限リ代料ヲ以テ給與スルコトヲ得

第五條 免職、休職、轉職若ハ死亡ノ際ハ其ノ貸與品ハ速ニ之ヲ還納セシムヘシ供用期限内ニ在ル給

與品亦同シ但シ給與品中代料ヲ以テ給與シタルモノハ供用殘期ニ相當スル金額ヲ返納セシムヘシ

第六條 貸與品又ハ供用期限内ノ給與品ヲ毀損紛失シタル者アルトキハ代品ヲ給與又ハ貸與ス但シ

其ノ毀損紛失過失怠慢ニ出テタルモノナルトキハ其ノ代料辨償ノ責ニ任セシムヘシ

第七條 給與品ノ修補ハ總テ自辨トス

附 則

第八條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス但シ本令施行ノ際既ニ給與シタル現品ニハ之ヲ適

用セス

○ 北海道廳森林監守給與品及貸與品規則 明治三十二年六月 勅令第二百九十五號

朕北海道廳森林監守給與品及貸與品規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳森林監守給與品及貸與品規則

第一條 北海道廳森林監守ニ給與スヘキ品目左ノ如シ但シ甲種外套ハ當分ノ内給與セサルコトアル

- 一 冬 服
- 一 夏 服
- 一 甲種外套
- 一 乙種外套
- 一 帽
- 一 日 覆

第二條 北海道廳森林監守ニ貸與スヘキ品目左ノ如シ

- 一 帽 章
- 一 劍 帶
- 一 外套及被服ノ釦
- 一 外套 綿 革
- 一 手 簿
- 一 捕 繩

第三條 給與品ハ現品ヲ以テ給ス其ノ員數及供用期限ハ左ノ如シ但シ己ヲ得サル事情アルトキハ内務大臣ノ認可ヲ經テ其ノ供用期限ヲ變更スルコトヲ得

- 一 冬 服 一 組 二 年
- 一 夏 服 一 組 二 年
- 一 甲 種 外 套 一 箇 二 年
- 一 乙 種 外 套 一 箇 二 年
- 一 帽 一 箇 一 年
- 一 日 屨 一 箇 四 箇 月

前項供用期限ノ外北海道廳長官ハ保存期限ヲ定ムルコトヲ得

第四條 北海道廳森林監守退職又ハ死亡シタルトキハ其ノ貸與品ハ直ニ之ヲ還納セシムヘシ供用期限内ノ給與品ニ付テモ亦同シ

第五條 貸與品又ハ供用期限内ノ給與品ヲ過失怠慢ニ因リ毀損紛失シタル者ハ其ノ辨償ノ責ニ任ス第六條 給與品ノ修補ハ總テ自辨トス

附 則

本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

正編下卷八五
三十三番

○千島國在勤北海道廳職員手當給與方中改正
明治三十一年勅令第三百五十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十一年勅令第三百五十八號中左ノ通改正ス
第一項中「巡查」ノ下ニ「森林監守、事業手」ヲ加フ
別表中巡查ノ次ニ左ノ如ク加フ

森 林 監 守	十 圓 以 內
事 業 手	十 圓 以 內

○東京府下及沖繩縣下ノ島嶼ニ在勤スル地方官廳ノ判任官及巡查雇員ニ手當給與方
明治三十四年四月勅令第六十四號

朕東京府下及沖繩縣下ノ島嶼ニ在勤スル地方官廳ノ判任官及巡查雇員ニ手當給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
東京府下小笠原島、大島、八丈島、小島、青ヶ島、鳥島及沖繩縣下宮古島、八重山島、久米島ニ在勤スル地方官廳ノ判任官及巡查雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ手當ヲ給スルコトヲ得其ノ給與細則ハ内務大臣之ヲ定ム

三十四年內務省令第八號ヲ以テ給與細則ヲ定ム

第二十四類 千島國在勤北海道廳職員ノ手當給與方中改正
東京府下及沖繩縣下ノ島嶼ニ在勤スル地方官廳ノ判任官及巡查雇員ニ手當給與方

(別表)

判任官	六圓以内
巡查	五圓以内
雇員	五圓以内

○神宮司廳職員官等俸給中改正明治三十三年九月勅令第三百七十八號

朕明治三十三年勅令第九十號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年勅令第九十號中「宮司」ヲ「大宮司」ニ「權宮司」ヲ「少宮司」ニ「權禰宜」ヲ「禰宜」ニ「主典」ヲ「權禰宜」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○

○神部署職員俸給明治三十三年九月勅令第三百七十五號

朕神部署職員俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

正續下卷八五
九丁參看

神部署職員ニハ參務員ヲ除クノ外俸給ヲ支給ス其ノ金額及支給規則ハ内務大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○第二十五類 任免

○文官試験規則中改正明治三十四年七月
勅令第百四十六號

除樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官試験規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試験規則中左ノ通改正ス

第十二條中「卒業證書ヲ有スル者」ノ下ニ「及學習院大學科四學年ノ課程ヲ卒業シタル者」ヲ加フ

正編下卷八八
九丁參看

○領事官特別任用令中改正明治三十三年九月
勅令第百七十一號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ領事官特別任用令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

領事官特別任用令中左ノ通改正ス

第一條中「二等領事」ヲ「副領事」ニ改ム

第二條中「二等」ヲ削ル

第三條 削除

正編下卷九〇
二丁參看

○望樓長望樓手任用令中改正明治三十四年三月勅令第十號
 朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ望樓長望樓手任用令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 望樓長望樓手任用令中左ノ通改正ス

第一條 望樓長望樓手ハ望樓長望樓手試験ニ合格シタル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

第二條 削除

第四條中「銓衡ヲ經テ」ノ下「望樓長」ヲ削ル

第五條ノ二 望樓長望樓手ハ滿五箇年以上服務スヘキモノトス但シ望樓手ヨリ望樓長ニ任用セラレタル者ニ在リテハ望樓手タリシトキノ服務年數ヲ通算ス

○海軍定期職工條例明治二十九年三月勅令第二十二號

朕海軍定期職工條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍定期職工條例

第一條 海軍諸工廠ニ定期職工ヲ置ク

第二條 定期職工ノ就業年期ヲ左ノ四期トシ第二期以下ノ者ハ各其ノ前就業期滿了ノ者ヨリ志願ニ依リ採用ス

第一期 滿十箇年

第二期 滿六箇年

第三期 滿四箇年

第四期 滿三箇年

第三條 定期職工ニ採用スヘキ者ノ年齢ハ滿二十一年ヨリ滿四十五年マテトシ其ノ就業年齡ハ滿五十五年マテトス但特別ノ技能アル者ハ滿六十年マテ就業セシムルコトヲ得

第四條 定期職工ノ就業年ハ定期職工ヲ命シタル日ヨリ每一週年ヲ以テ一箇年トシテ之ヲ算ス

每一週年間ニ於テ就業セサル日數通シテ六十日ヲ超ユルトキハ其ノ一箇年ハ就業年期中ニ算入セ

第五條 定期職工左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ滿期賜金トシテ其ノ年期中就業シタル總日數ニ滿期若クハ最終就業ノ日ニ於ケル日給額十分ノ一ヲ乘シタル金額ヲ給ス但第四ニ該ルトキハ其ノ遺族ニ給ス

- 一 各年期滿了ニ至リタルトキ
- 二 年齡滿限ニ依リ定期職工ヲ免シタルトキ
- 三 公務ニ因リ傷積ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘズ定期職工ヲ免シタルトキ
- 四 公務ニ原因スルト否トヲ問ハズ死亡シタルトキ
- 五 工業ノ張弛其ノ他職務ノ都合ニ依リ定期職工ヲ免シタルトキ
- 六 海軍部内ノ學校生徒ヲ命セラレタルトキ

第六條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ定期職工ヲ免シ滿期賜金ヲ給セス

一 第四條第二項ノ場合一期中二回ニ及フトキ

二 引續キ滿百二十日間就業セサルトキ

三 一期中平均百日ニ對シ十六日以上就業セサルトキ

四 輕罪以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

第七條 定期職工ノ採用就業及日給並滿期賜金ノ給與ニ關スル規程ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第八條 現ニ海軍工廠ノ職工ニシテ五箇年以上引續キ就業シ年滿四十五年以上滿五十年以下ニシ

テ身體強壯工藝拔群ノ者ハ本條例施行ノ際志願ニ依リ定期職工ニ採用スルコトヲ得

第九條 本條例ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス但第五條ノ規程ハ明治三十年四月一日ヨリ施行

ス

二十九年海軍省令第四號ヲ以テ給與規程ヲ定ム

○帝國圖書館長司書官及司書任用方明治三十三年八月勅令第三百三十八號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國圖書館長、司書官及司書任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 帝國圖書館長ハ一箇年以上帝國圖書館司書長ノ職ニ在リタル者及一箇年以上帝國圖書館司

書官ノ職ニ在ル者又ハ在リタル者ニ限リ試験ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用ス

正編下九二九
丁參引

ルコトヲ得

第二條 帝國圖書館司書官ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ニ限リ試験ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡

ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

一 學位又ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育若ハ圖書ニ關スル公務ニ從事シタル者

二 三箇年以上教育若ハ圖書ニ關スル公務ニ從事シ現ニ月俸三十圓以上ヲ受クル判任官以上若ハ

判任官待遇以上ノ者

三 圖書ニ關シ特別ノ學術技藝ヲ有スル者

第三條 帝國圖書館司書ハ圖書ニ關シ學術經驗アル者ニ限リ試験ヲ要セス文官普通試驗委員ノ銓衡

ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

○

○外國在勤警部巡查任用及支給規則中改正明治三十四年七月勅令第三百五十二號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ外國在勤警部巡查任用及支給規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外國在勤警部巡查任用及支給規則中左ノ通改正ス

第十四條 外國在勤巡查ノ遺族ニハ他ノ法令ニ定メタルモノノ外左ノ諸項ニ依リテ給助ヲ爲ス

一 職務ノ爲在職中死亡シタルトキハ一時金百圓

二 任所ニ於テ死亡シタルトキハ任所ヨリ東京迄ノ人馬船車料ノ規定額

正編下卷九四
三丁參看

三 任所往返中ニ於テ死亡シタルトキハ外務大臣ニ於テ相當ト認ムル人馬船車料ノ額但シ任所東京間ノ人馬船車料規定額ヲ超過スルコトヲ得ス

附則

本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○第二十六類 服務、懲戒

○神官神職懲戒令中改正明治三十三年十月
勅令第三百八十九號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ神官神職懲戒令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
神官神職懲戒令中左ノ通改正ス

第一條中「神官」ノ下ニ「神職」ヲ「奏任官」ノ下ニ「及奏任待遇ノ官ニ在ル者」ヲ加フ

附則
本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○瀆職法明治三十四年四月
法律第三十七號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル瀆職法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
瀆職法

第一條 法令ニ依リ選舉又ハ任用シタル議員、會員、委員又ハ總代其ノ職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許若ハ要求シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

正編下卷九九
二丁參看

賄賂ヲ贈與、提供又ハ約束シタル者亦同シ

第二條 前條ニ記載シタル賄賂ヲ已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其ノ價ヲ追徴ス

○第二十七類 恩給

○各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當内規明治十二年二月
大政官達第四號

各廳技術工藝ノ者就業上死傷ノ節手當内規別紙ノ通相定候條自今右ニ照準施行可致此旨相達候事
但一般官員ト雖モ技術上死傷ノ節ハ本文ニ準シ候儀ト可相心得事
(別紙)

各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當内規

第一條 凡技術工藝ノ者就業上死傷ニ罹ル時ハ其原由並傷痕ノ輕重ヲ檢察シ醫員ノ診斷證書ヲ審査シ表面ニ照シテ手當金ヲ給スヘシ

第二條 傷痕ノ輕重ヲ分テ左ノ五等トス

一等 重傷死ニ至ル者

二等 重傷死ニ至ラスト雖モ終身不具トナリ自用ヲ辨スルコト能ハサル者

三等 自用ヲ辨シ得ルト雖モ終身事業ヲ營ムコト能ハサル者

四等 事業ヲ營ムコトヲ得ルト雖モ身體ヲ毀傷シ舊ニ復スルコトヲ得サル者

五等 身體ヲ毀傷スト雖モ一時治療ヲ施シ止ク其痕痕ヲ存スル迄ニテ其運用全ク舊ニ復スル者

第三條 手當金ヲ分ツテ療養埋葬及扶助料ノ三種トス

十九年閣令第
二十三號及第
十三號及第
十四號及第

一等傷ニ罹ル者ハ療養料埋葬料ヲ給シ遺族ニ扶助料ヲ給ス尤モ遺族ハ死者ニヨリ生計ヲ營ミ來リタルモノ(二戸籍内)ニ限ルヘシ但即死シテ療治ヲ施ササル者ハ療養料ヲ給セス且療養中他病ノタメニ死スル者ヘハ扶助料ヲ給セス

埋葬料ハ親戚ニ給ス親戚ナキハ同僚又ハ其所在戸長ニ下付シテ埋葬セシム

二等三等四等ノ傷病ニ罹ル者ハ療養料扶助料ヲ給ス

五等ノ傷病ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給ス但身體ヲ毀傷シ舊ニ復スルノ見込アリト雖モ治療數月ニ沙リ職務ヲ免スル者ハ四等傷ニ準シ扶助料ヲ給ス尤療養料ハ免職翌日ヨリ之ヲ給セス

各廳技術工藝者就業上死傷手當内規表

給與事項	任			外
	判	任	等	
一等	埋葬料	金百圓	金五十圓	金二十五圓
二等	遺族扶助料	金三百五十圓	金百七十五圓	金九十圓
	扶助料	金三百五十圓	金百七十五圓	金九十圓
三等	同	同上	金百貳拾五圓	金六拾五圓
四等	同上	同上	金百五十圓	金七拾五圓
五等	同上	同上	同上	金四拾圓

一 右ノ金高ハ表面ノ額ヲ最上限トシ實際ノ情狀ヲ酌量シテ支給ス

二 療養料ハ總テ現費トス

一 備名義ヲ以テ等内外官吏ノ事務ヲ取扱フ者ハ月俸三百五十圓以上奉任ニ三百五十圓未滿三拾圓以上ハ判任ニ三拾圓未滿ハ等外ニ準シ日給ノ者ハ其給三十日分ヲ積算シ月俸ニ見做シ本文ノ割合ヲ以テ給ス

○ 巡查看守退隱料及遺族扶助料法明治三十四年七月法律第三十八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル巡查看守退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查看守退隱料及遺族扶助料法

第一條 巡查又ハ看守勤績十年以上ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ給ス

一 年齡五十歳ヲ超ヘ退職シタルトキ

二 傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキ

三 廢官廢廳ニ依リ退職シタルトキ

四 身體若ハ精神ノ衰弱又ハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタルトキ

前項ノ退隱料年額ハ退職當時ニ於ケル月俸三箇月分トシ勤績十年以上三十年ニ至ル迄一年ヲ加フル毎ニ退職當時ノ月俸額十分ノ一ヲ増加ス

第二條 巡查又ハ看守勤続一年以上十年未滿ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ一時金ヲ給ス但シ退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者ハ此ノ限ニ在ラス
一時金ハ退職當時ニ於ケル月俸額ノ三分ノ二ニ勤続年數ヲ乘シタル額トス

第三條 退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ勤続一年以上ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ前後通算シテ勤続三十年ニ至ル迄後ノ勤続一年ヲ加フル毎ニ後ノ退職當時ニ於ケル月俸額十分ノ一ヲ退隱料年額ニ増加ス

一時金ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ前後通算シテ勤続十年以上ニ至ル者ニハ第一條ニ依リ退隱料ヲ給シ十年未滿ノ者ニハ第二條ニ依リ後ノ勤続年數 對スル一時金ヲ給ス

第四條 巡查又ハ看守職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ又ハ之ニ準スヘキ者ト爲リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキハ退隱料ヲ給ス

前項ノ退隱料年額ハ退職當時ノ月俸三箇月分乃至六箇月分トス

第一條及第三條ニ依リ退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者本條第一項ニ當ルトキハ其ノ退隱料年額ニ退職當時ノ月俸四箇月分以内ヲ増加ス

前二項ニ依リ退隱料年額及增加金額ハ傷痍疾病ノ輕重ニ依リ之ヲ定ム

第五條 前條ノ規定ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ク又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以内ニ其ノ傷痍疾病ニ起因シ前條第一項ニ當ルニ至リタル者ニ之ヲ準用ス

第六條 巡查又ハ看守交互ニ轉職シ又ハ他ノ官職ニ轉シタルトキハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタル者ト看做ス

第七條 巡查又ハ看守左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ遺族ニ扶助料ヲ給ス

- 一 職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ在職中死亡シタルトキ
- 二 勤続十年以上ニシテ在職中死亡シタルトキ
- 三 退隱料ヲ受ク又ハ受クヘクシテ死亡シタルトキ

扶助料年額ハ前項第一號ノ場合ニ在リテハ第四條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トシ第二號ノ場合ニ在リテハ第一條又ハ第三條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ一トシ第三號ノ場合ニ在リテハ其ノ退隱料年額ノ三分ノ一トス但シ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以内ニ其ノ傷痍疾病ニ起因シテ死亡シタルトキハ第四條第五條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トス

第八條 扶助料ハ寡婦ニ給ス寡婦死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ子ニ給ス
數子間ニ在リテハ法定家督相續ノ順位ニ依リ最先者ニ給ス最先者死亡シ若ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ順次次位者ニ轉給ス

民法第九百六十九條ニ依リ家督相續人タルコトヲ得サル者及推定家督相續人ニシテ廢除セラレタル者ニハ扶助料ヲ給セス但シ疾病其ノ他身體又ハ精神ノ狀況ニ依リ家政ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲廢除セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス
養子ハ家督相續人ニ非サレハ扶助料ヲ給セス

第九條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及子ナキトキハ扶助料ハ直系尊屬ニ給ス

前項ノ場合ニ在リテハ先ツ父ニ給シ父死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此ノ例ニ依ル

第十條 扶助料ヲ受クル者ナクシテ死亡シタル者ノ家ニ在ル兄弟姉妹二十歳未滿又ハ篤疾若ハ癡疾ニシテ自活スルコト能ハサルトキハ扶助料ニ相當スル金額ノ三箇年分以内ヲ一時限リ給スルコトアルヘシ

第十一條 退隱料ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ之ヲ給セス

一 國籍ヲ喪失シタルトキ

二 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 在職中ノ犯罪ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

第十二條 遺族ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ扶助料ヲ給セス

一 前條第一號又ハ第二號ニ當ルトキ

二 寡婦婚姻シタルトキ

三 子年齢二十歳ニ滿チタルトキ

四 尊屬ノ女婚姻シタルトキ

第十三條 子二十歳ニ滿ルモ篤疾又ハ癡疾ニシテ自活スルコト能ハス他ニ扶助料ヲ受クル者ナキトキハ其ノ事由ノ存續スル間扶助料ノ三分ノ一ヲ給スルコトアルヘシ

第十四條 退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間退隱料ノ支給ヲ停止ス

一 公權ヲ停止セラレタルトキ

二 六箇月以上行方不明ナルトキ

退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者及ヒ判任官待遇以上ノ官職ニ就キタル場合ニ於テハ其ノ俸給月額ニ退隱料月額ヲ合シ退職當時ニ於ケル俸給月額ニ超過スルトキハ其ノ超過額ニ對スル退隱料ノ支給ヲ停止ス

第十五條 扶助料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者前條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間扶助料ノ支給ヲ停止シ第八條第九條ノ順位ニ依リ之ヲ次位者ニ轉給ス

第十六條 退隱料及扶助料ノ年額並一時金ノ圓位未滿ハ圓位ニ滿タシム

第十七條 巡查又ハ看守ノ勤続年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終ル但シ十二箇月未滿ノ端數ハ之ヲ算入セス

休職及教習中ノ月數ハ勤続年數ニ算入ス

第十八條 巡查又ハ看守其ノ職務ヲ以テ從軍シタルトキハ軍人恩給法ノ算則ニ照ラシテ從軍年ヲ加算ス

第十九條 本法ニ於テ寡婦、子、尊屬ト稱スルハ巡查又ハ看守タリシ者死亡ノ當時ヨリ引續キ其ノ家ニ在ル者ヲ謂フ但シ父死亡後出生シタル嫡出ノ子ハ死亡當時其ノ家ニ在ル者ト看做ス

第二十條 退隱料及扶助料ノ支給、停止及廢止ハ其ノ事由ノ生シタル翌月ヨリ之ヲ行フ

第五條ニ依ル退隱料ノ支給ハ事由認定ノ翌月ヨリ始マリ前條但書ニ依ル扶助料ノ支給ハ出生ノ翌月ヨリ始マル

第二十一條 退隱料、一時金及扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル日ヨリ三年以内ニ請求スルニ非ツレバ之ヲ給セス

第二十二條 退隱料ハ民事訴訟法第五百七十條及第六百十八條ノ規定ニ關シテハ恩給ト看做ス

第二十三條 本法ニ依ル給與金ノ支給ニ關スル事項ヲ裁定スヘキ行政官廳ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條 本法ニ依ル給與金ハ巡查又ハ看守最後ノ退職又ハ死當時ニ於テ俸給ヲ受ケル經濟ノ負擔トス

第二十五條 本法ニ依ル給與金ノ一部又ハ全部ヲ拒否セラレタル若其ノ拒否ヲ不當ナリトスルトキハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニシテ權利ヲ侵害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十六條 本法ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用ス

附則

第二十七條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十八條 明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ハ巡查、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄

第三十四年勅令
第百四十七號
以テ三十四
年八月一日
施行

看守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス但シ巡查看守給助例ニ依リ現ニ給助ヲ受クル者又ハ既ニ受クヘキ事由ノ生シタル者又ハ其事由ニ起因シテ一年以内ニ重症ニ趨キ又ハ死亡シタル者ニ對シテハ其ノ第一條乃至第七條ヲ適用スルノ外本法第三條、第十一條、第十二條、第十四條、第十五條、第二十條第一項、第二十一條、第二十三條及第二十五條ヲ準用ス
明治十五年太政官達第六十六號ハ巡查、看守ニ明治三十三年法律第三十號ハ巡查、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用ス

○巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令 明治三十四年七月勅令第百四十八號
朕巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令

第一條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第四條第二項ノ退隱料年額及同條第三項ノ增加金額ノ等差ハ左ノ如シ

- | | 退隱料年額 | 增加金額 |
|----|-------------------------|-------|
| 第一 | 兩眼ヲ盲シ若ハ二肢以上ヲ亡シタルトキ | 六箇月分 |
| 第二 | 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ | 四箇月分 |
| 第三 | 一肢ヲ亡シ若ハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ | 三箇月半分 |
| 第四 | 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ | 二箇月半分 |

第五 一眼ヲ盲シ若ハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 四箇月分 二箇月分
第六 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹タルトキ 三箇月分 一箇月分
傷痕疾病ノ等差ハ文官傷痕疾病等差例ニ依ル

第二條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第二十三條ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ内閣恩給局長、其ノ他ニ在リテハ地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監）トス
臺灣ニ於テハ前項ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ臺灣總督其ノ他ニ在リテハ知事及廳長トス

附則

本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○巡查看守退隱料及遺族扶助料取扱規程（明治三十四年八月一日）

巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令ニ依リ内閣恩給局長ノ管掌ニ屬スル巡查看守退隱料及遺族扶助料取扱規程左ノ通之ヲ定ム

第一條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法ニ依リ退隱料又ハ一時金ヲ受クヘキ者ハ退職當時ノ本廳ノ長官ニ請求スヘシ但シ廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ請求スヘシ
第二條 前條ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在職履歷書

二 戶籍謄本

但シ一時金請求書ニハ戶籍謄本ノ添付ヲ要セス

巡查看守退隱料及遺族扶助料法第三條第一項及第四條第三項ニ依ル退隱料年額増加ノ請求書ニハ前項書類ノ外前ニ受ケタル退隱料證書ヲ添付スヘシ

第三條 職務ノ爲傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其ノ事實ヲ證明スヘシ
一 傷痕又ハ疾病ノ職務ニ起因シタル事實ヲ認ムヘキ證據書類
二 醫師ノ診斷書

第四條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ヲ受クヘキ遺族ハ戶籍謄本及第五條乃至第十一條ノ書類ヲ添付シ住所ノ地方長官ニ請求スヘシ

第五條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第七條第一項第一號又ハ第二號ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死亡者ノ履歷書ヲ其ノ遺族ニ下付スヘシ同條第一項第三號未段又ハ同條第二項但書ニ當ル者ノ遺族ノ請求アルトキ亦同シ

第六條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第七條第一項第一號又ハ同條第二項但書ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ査覈シ其ノ傷痕又ハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其ノ診斷書ヲ併セテ其ノ遺族ニ下付スヘシ

第七條 退隱料ヲ受ケタル後死亡シタル者ノ遺族ニシテ扶助料ヲ請求スルモノハ死亡者ノ受ケタル退隱料證書ヲ添付スヘシ

第八條 扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利消滅シタルトキ其ノ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ前者ノ扶助料證書ヲ添付スヘシ

第九條 重罪ノ刑ニ處セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ヲ證明スヘキ確定裁判ノ原本ヲ添付スヘシ

第十條 六箇月以上行方不明トナリタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ニ關スル市町村長ノ證明書ヲ添付スヘシ

第十一條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第十條又ハ第十三條ニ當リ扶助料ヲ請求スル者ハ自活スルコト能ハサル事實ニ付テハ市町村長ノ證明書、篤疾又ハ癡疾ニ付テハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第十二條 退隱料又ハ一時金ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在職年數及退隱料年額又ハ一時金計算書ヲ作り證據書類ヲ添へ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添へ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

第十三條 内閣恩給局長ニ於テ退隱料、扶助料又ハ一時金ノ支給ヲ許可シタルトキハ證書ヲ作り

本人住所地ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付スヘシ但シ退隱料又ハ一時金ノ證書ヲ下付スルトキハ先ツ第一條ニ依リ請求ヲ爲シタル官廳ヲ經由スヘシ

前項ノ證書ヲ下付シタルトキハ内閣恩給局長ニ其ノ旨ヲ支給主管省ニ通知スヘシ

第十四條 退隱料及扶助料ハ其ノ年額ヲ四分シ四月、七月、十月、一月ニ於テ其ノ前三箇月分ヲ支給ス但シ退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利ノ消滅若ハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第十五條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者重罪若ハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其ノ確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ支給主管省ニ通知スヘシ

第十六條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第十四條第二項ニ當ル者アルトキハ其ノ任用シタル官廳ヨリ支給主管省ニ通知スヘシ爾後其ノ俸給額ニ異動アルトキ及解任シタルトキ亦同シ但シ該通知書ニハ支給廳名、俸給額及其ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十七條 支給主管省ニ於テ前二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局長及支給廳ニ通知スヘシ

第十八條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ若ハ權利消滅シタルトキハ其ノ遺族又ハ本人ヨリ之ヲ支給廳ニ届出ヘシ

第十九條 支給廳ニ於テ退隱料又ハ扶助料ノ支給ヲ廢止シ若ハ停止シタルトキハ其ノ事由ヲ具

シ之ヲ支給主管省及内閣恩給局ニ通知スヘシ但シ支給主管省ヨリ權利ノ消滅若ハ停止ニ關シ通知ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 退隱料又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ住所地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其ノ事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此ノ場合ニ於テ恩給局ハ證書ノ原本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項證書ノ原本ハ本證書ト同一ノ效力アルモノトス

第二十一條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ第十三條ノ證書ヲ添ヘ住所地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ハ證書ノ裏面ニ其ノ事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其ノ旨ヲ内閣恩給局及支給主管省ニ通知スヘシ

附則

第二十二條 巡查看守給助例ニ依リ退職給助、傷病給助又ハ死亡給助ヲ受クル者若ハ受クヘキ者ハ其ノ給與ノ種類ニ從ヒ退隱料、一時金又ハ扶助料ヲ受クル者若ハ受クヘキ者ニ準シ第十條ヲ除クノ外本令ノ規定ヲ準用ス

第二十三條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本令ニ於テ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ戸長又ハ之ニ準スヘキ者ニ於テ之ヲ行フヘシ

第二十四條 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○巡查看守療治料、給助料及甲祭料給與令 明治三十四年七月勅令第四百四十九號

巡查看守療治料、給助料及甲祭料給與令

第一條 巡查又ハ看守職務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ本屬長官ニ於テ治療ヲ要スルモノト認ムルトキハ其ノ治療中療治料ヲ給ス

療治料ハ一日二圓以内トス但シ治療費一日平均二圓ヲ超過シタルトキハ適當ト認ムヘキ實費ヲ精算シテ之ヲ追給スルコトアルヘシ

第二條 療治料ヲ受クル者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ給助料ヲ給ス

一 治療二十日以上ニ涉リ引續在職シ治療ヲ要セサルニ至リタルトキ

二 療治料給與ニ係ル傷病ニ因リ職ニ堪ヘス退職シ治療ヲ要セサルニ至リタルトキ

前項ノ給助料ハ第一號ニ當ル者ニ在リテハ治療ヲ要セサルニ至リタル當時ノ月俸一箇月分トシ第二號ニ當ル者ニ在リテハ退職當時ノ月俸三箇月分トス

療治料ヲ受クル者治療二十日以上ニ涉ラスト雖引續在職シ本屬長官必要ト認ムルキハ治療ヲ要セサルニ至リタル當時ノ月俸一箇月分以内ノ範圍ニ於テ給助料ヲ給スルコトアルヘシ但シ治療七日ニ滿タサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三條 巡查又ハ看守在職中死亡シタルトキハ左ノ順位ニ從ヒ其ノ家ニ在ル親族ニ弔祭料ヲ給ス但シ同順位間ニ在リテハ其ノ親等ノ最モ近キ者ヲ先ニシ同親等間ニ在リテハ男ハ女ニ先チ同性間ニ在リテハ長ハ幼ニ先ツ

一 配偶者

二 直系卑屬

三 直系尊屬

四 兄弟姉妹

前項親族ニシテ公權剝奪者ハ停止中ニ係リ又ハ行方不明ナルトキハ弔祭料ヲ給スル限ニ在ラス但シ次位者アルトキハ之ヲ轉給ス

弔祭料ハ死亡當時ニ於ケル月俸一箇月分トシ勤続一年以上九年ニ至ル迄一年ヲ加フル毎ニ死亡當時ニ於ケル月俸額三分ニテ増加ス但シ職務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ因テ死亡シタル者ニハ更ニ死亡當時ニ於ケル月俸六箇月分ヲ増加ス

勤続年數ノ計算ニ關シテハ巡查看守退隱料及遺族扶助料法ノ例ニ依ル

第四條 前條ニ依リ弔祭料ヲ受ルヘキ者ナキトキハ死亡者ノ爲葬祭ヲ行フヘキ者ニ前條ニ定ムル金額ノ三分ノ一以内ヲ給スルコトアルヘシ

第五條 休職者ハ在職者ニ準シ休職ヲ命セラレタル當時ノ月俸額ニ依リ本令ニ依ル給與ヲ行フ

第六條 本令ニ依ル給與ハ之ヲ行フヘキ事由ノ生シタル當時ニ於テ俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔

トス但シ休職者ニ在リテハ休職ヲ命セラレタル際俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔トス

第七條 本令ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警査、貴族院守衛及衆議院守衛ニ之ヲ適用ス

附則

本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○第二十八類 臺灣ニ關スル法規

●公文、法例

正編下卷一
八八丁參看

○法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限中改正明治三十四年十一月
勅令第二百十八號
朕明治二十九年勅令第二百九十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十九年勅令第二百九十二號中「各縣島廳」ヲ「各廳」ニ改ム

●學事、軍事、衛生

○臺灣公學校令中改正明治三十四年十一月
勅令第二百五號

朕臺灣公學校令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣公學校令中左ノ通改正ス

第九條 公學校ハ廳長又ハ支廳長之ヲ管理スヘシ

正編下卷一
九三丁參看

○軍機保護法ヲ臺灣ニ施行明治三十四年六月
勅令第三百三十二號

第二十八類 法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限中改正 臺灣公學校令中改正
軍機保護法ヲ臺灣ニ施行

朕軍機保護法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
軍機保護法ヲ臺灣ニ施行ス

○軍港要港ニ關スル規定及同違犯者處分ノ件明治三十四年十月勅令第九十二號

朕明治二十三年法律第二號及同年法律第八十三號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第二號及同年法律第八十三號ヲ臺灣ニ施行ス

○臺灣藥品取締規則明治三十三年九月律令第十七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣藥品取締規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣藥品取締規則

第一條 醫療用ニ供スル藥品ノ性狀品質ハ日本藥局方ニ記載アルモノハ同局方ノ所定ニ適合シ同局方ニ記載ナキモノハ其依ル所ノ外國藥局方ニ適合スルヲ要ス

何レノ藥局方ニモ記載ナキ新規ノ藥品ハ內務省所管衛生試驗所ノ検査ヲ經其試驗成績ヲ記スヘシ

第二條 前條ノ藥品ハ內務省所管衛生試驗所又ハ臺灣總督府製藥所ノ試驗ヲ經封緘アルモノニアラ

サレハ販賣若ハ授與スルコトヲ得ス

第三條 日本藥局方及外國藥局方中特ニ貯藏法ヲ示シタルモノハ其所定ニ從ヒ貯藏スヘシ

第四條 日本藥局方及外國藥局方ノ貯藏法其他ノ規定ニ關シ別ニ臺灣總督ノ定ムルモノハ其規定ニ依ル

第五條 藥品ノ容器又ハ包紙ニハ假名又ハ漢字ヲ以テ其藥名ヲ記スヘシ但雜句語又ハ他ノ外國語ト併記スルモ妨ケナシ

第六條 毒藥劇藥ハ藥劑師又ハ醫師ニ於テ醫師ノ處方箋ニ依リ患者ニ與フルモノヲ除ク外醫師、藥劑師、藥種商、製藥者間ニアラサレハ賣買、授受又ハ所持スルコトヲ得ス

學術、工業又ハ營業ノ用ニ供スルモノ及傳染病豫防ノ爲消毒藥ニ使用スルモノハ前項ノ限ニアラス

第七條 前條第二項ニ依ル毒藥、劇藥ハ其使用者ヨリ藥名、量數、使用ノ目的、年月日及住所、氏名、職業ヲ記シ且捺印シタル證書ヲ差出シタルトキハ之ヲ販賣若ハ授與スルコトヲ得

前項ノ證書ハ其日付ヨリ滿十箇年間保存スヘシ

醫師、藥劑師、藥種商、製藥者ノ間ニ於テ毒藥、劇藥ヲ販賣授與スル場合ニ在テハ本條第一項ノ手續ヲ要セス單ニ其證明ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第八條 毒藥、劇藥ハ藥劑師ニラサレハ封緘ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第九條 毒藥、劇藥ハ他ノ藥品ト區別シ毒藥ハ鎖鑰ヲ備ヘタル場所ニ貯藏スヘシ

三十三年總督府令第八十八號
以テ品目ヲ定ム

- 第十條 毒藥、劇藥ハ藥品ノ容器又ハ包紙ニ第五條ノ記載ヲ爲スノ外毒藥ハ毒字、劇藥ハ劇字ヲ記スヘシ
 - 第十一條 毒藥、劇藥ノ處方箋ハ調劑シタル者捺印シテ其日付ヨリ滿十箇年間保存スヘシ
 - 第十二條 工業用ニ供スル目的ヲ以テ販賣セントスル藥品ハ其容器ニ工業用ノ文字ヲ記シ且醫療用藥品ト置場ヲ異ニスヘシ
 - 第十三條 毒藥、劇藥ノ品目ハ臺灣總督之ヲ定ム
 - 第十四條 臺灣總督ハ監視員ヲシテ藥品製造販賣、貯藏又ハ使用ノ場所ヲ巡視セシムヘシ
 - 第十五條 監視員ノ検査ニ消費シタル藥品ハ其代價ヲ請求スルコトヲ得ス
 - 第十六條 此規則中醫師ニ關スル規定ハ總テ獸醫ニ之ヲ準用ス
 - 第十七條 此規則第一條第二項、第二條、第六條第一項、第七條第一項、第八條ニ違背シタル者ハ四十以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 - 第十七條第二項、第九條、第十條、第十一條ニ違背シタル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
 - 第三條、第五條、第十二條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 附則
- 第十八條 此規則ハ明治三十四年一月一日ヨリ施行ス

○臺灣汚物掃除規則 明治三十三年八月 律令第十五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣汚物掃除規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣汚物掃除規則

- 第一條 土地ノ業主使用者又ハ占有者ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ其地域内ノ汚物ヲ掃除シ清潔ヲ保持スル義務ヲ負フ
- 傳染病發生シ又ハ發生ノ虞アリト認メ地方長官ニ於テ臨時消毒の清潔法ノ施行ヲ命シタルトキハ前項ノ義務者ハ其指定セラレタル期限内ニ其指定ノ方法ニ從ヒ之ヲ履行スヘシ
- 第二條 地方長官ハ前條義務者ノ蒐集シタル汚物ヲ運搬シ衛生上無害ノ方法ニ依リ處分スヘシ但地方ノ狀況ニ依リ臺灣總督ハ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得
- 前項ノ費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ
- 第三條 此規則又ハ此規則ニ基キ發シタル命令ニ依リ義務者ニ於テ履行スヘキ事項ヲ履行セス又ハ履行スルモ十分ナラスト認メタルトキハ地方長官ハ地方稅ヲ以テ之ヲ履行シ其費用ヲ義務者ヨリ徵收スルコトヲ得
- 義務者前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セザルトキハ臺灣租稅滯納處分規則ニ依リ徵收ス
- 第四條 當該吏員ハ掃除ノ實況ヲ監視シ必要ナル事項ヲ施行スル爲其事由ヲ告知シテ私人ノ土地及建造物内ニ立入スルコトヲ得
- 第五條 官廳及其保管ニ屬スル地域内ノ汚物掃除ニ付テハ其首長ハ地方長官ト協議シ此規則ニ準シ

相當ノ方法ヲ施行スヘシ

第六條 汚物ノ種類汚物掃除並清潔保持ノ方法及施設ニ關スル事項ハ臺灣總督之ヲ定ム

第七條 此規則ヲ施行スヘキ地域ハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ地方長官之ヲ定ム

●貨幣、公債、度量衡

○臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券通用並同銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル件明治三十三年七月廿九日法律第二十號

三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券通用並同銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券ハ租稅其他政府ノ收納金及一切ノ取引ニ差支ナク通用スルモノトス
前項銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル犯罪ニ付テハ刑法第二編第四章第一節ノ規定ヲ準用ス

○臺灣度量衡條例明治三十三年十一月廿九日法律第二十號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣度量衡條例勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣度量衡條例

第一條 度量衡ノ基本ハ度量衡法第一條ノ規定ニ依ル

第二條 度量衡ノ原器及副原器ハ度量衡法第二條及第六條ニ定メタル原器及副原器ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 度量衡 名稱命位ハ度量衡法第三條ノ規定ニ依ル

第四條 「メートル」ハ度量衡ハ度量衡法第五條ノ比較ニ依リ之ヲ適法ノモノトシ此條例ノ規定ヲ適用ス

第五條 臺灣總督ハ副原器ニ依リ檢定原器ヲ製作シ之ヲ保管ス

檢定原器ハ度量衡器檢定ノ標準ニ供ス

第六條 度量衡器ノ種類、形狀、物質、公差及構造ハ臺灣總督之ヲ定ム

第七條 度量衡器ハ臺灣總督ノ特許ヲ得タル者ニアラザレハ之ヲ製作、修覆又ハ販賣スルコトヲ得ス

製作ノ特許ヲ得タル者ハ修覆及販賣スルコトヲ得

衡器販賣ノ特許ヲ得タル者ハ臺灣總督ノ指定スル衡器ノ一部修覆ニ限修覆スルコトヲ得

第八條 度量衡器ヲ製作、修覆又ハ輸入シテ之ヲ販賣シ若ハ證明ノ用ニ供スル者ハ其檢定ヲ受クヘシ但左ニ掲クルモノハ此限ニアラス

一 度量衡法第九條ノ檢定ニ合格シタル度量衡器ニシテ臺灣總督ノ指定シタルモノ

第二十八號

臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券通用並同銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル件

三百十九

三十四年總督府令第一號ヲ以テ施行規則ヲ定ム

二 臺灣總督ノ指定セル衡器ノ一部修葺ニ止マルモノ
 證明ノ用ニ供スル度量衡器ハ前項檢定ノ外定期檢定ヲ受クヘシ

第九條 度量衡器ノ檢定ハ臺灣總督之ヲ管理ス

第十條 度量衡器ノ檢定スヘキ目盛及分銅ノ最小定限並定期檢定ノ期間ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十一條 度量衡器ノ檢定ヲ受クル者ハ檢定料ヲ納ムヘシ但定期檢定ハ此限ニアラス
 檢定料ノ金額ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十二條 臺灣總督ハ度量衡器ノ製作、修葺、販賣及使用ヲ取締ル爲當該吏員ヲシテ臨檢セシムルコトアルヘシ

第十三條 度量衡器ノ製作、修葺又ハ販賣ノ特許ヲ得タル者此條例又ハ之ニ附隨スル命令ニ違反シタルトキハ臺灣總督ハ其營業ヲ停止シ又ハ其特許ヲ取消スコトヲ得

第十四條 特許ヲ得スシテ度量衡器ヲ製作、修葺又ハ販賣シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條ノ檢定ニ合格ノ證ナキ度量衡器ヲ販賣シ若ハ證明ノ用ニ供シ又ハ之ヲ所持シタル者及第十二條ニ依ル臨檢ヲ拒ミタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

差狂アル度量衡器ナルコトヲ知テ之ヲ販賣シ若ハ證明ノ用ニ供シタル者亦前項ニ同シ

第十五條 此條例ノ施行規則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第十六條 此條例ハ明治三十四年五月一日ヨリ施行ス

明治二十八年日令第五十八號度量衡器販賣規則ハ此條例施行ノ日ヨリ廢止ス

第十七條 從來慣用ノ本島度量衡器ハ當分ノ内人民相互間ニ限此條例ニ依ラザルコトヲ得

地積ノ名稱命位ハ當分ノ内臺灣土地調查規則第二條及第三條ノ規定ニ依ルコトヲ得

臺灣總督ハ前二項ノ規定ニ關シ制限ヲ設ケ又ハ其規定ヲ廢止スルコトヲ得

●土地、土木、登記

○臺灣保安林規則(明治三十四年九月)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣保安林規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣保安林規則

第一條 臺灣總督ハ左ニ列記スル箇所ニ在ル森林ヲ保安林ニ指定スルコトヲ得

一 土砂崩壞流出又ハ墜石ノ防備ニ必要ナル箇所

二 飛砂ノ防備ニ必要ナル箇所

三 水害風害潮害ノ防備ニ必要ナル箇所

四 水源ノ涵養ニ必要ナル箇所

五 魚附ニ必要ナル箇所
 六 公衆ノ衛生ニ必要ナル箇所
 七 航行ノ目標ニ必要ナル箇所
 八 社寺名所又ハ舊跡ノ風致ニ必要ナル箇所
 第二條 原野山嶽其ノ他ノ土地ニシテ前條各號ニ該當スルモノハ森林ニ準シ此ノ規則ヲ適用スルコトヲ得
 第三條 保安林ニ於テハ皆伐及開墾ヲ爲スコトヲ得ス
 第四條 行政官廳ノ許可ヲ得ルニアラサレハ保安林ニ於テ土石切芝ノ採取樹根ノ採掘樹木ノ伐採又ハ牛馬豚羊ノ放牧ヲ爲スコトヲ得ス
 第五條 臺灣總督ハ必要アリト認ムルトキハ保安林ノ伐木ヲ禁止又ハ制限スルコトヲ得
 第六條 臺灣總督ハ保安林ノ營林及保護ノ方法ヲ指定スルコトヲ得
 第七條 臺灣總督ハ保安林ヲ皆伐又ハ開墾シタル者又ハ第五條ノ禁止若ハ制限ヲ犯シテ伐木シタル者ニ對シ復舊ノ造林ヲ命スルコトヲ得
 第八條 前條ノ造林ヲ施行セス又ハ第六條ニ依リ指命シタル事項ヲ實施セサル者アルトキハ政府ヨ於テ之ヲ行ヒ臺灣租稅意納處分規則ニ依リ其ノ費用ヲ徵收シ又ハ其ノ造林ニ係ル部分ヲ部分林ト爲スコトヲ得
 第九條 保安林ハ其ノ指定ノ原因消滅シ又ハ公益上特別ノ事由生シタルトキハ臺灣總督ハ之ヲ解除

スルコトヲ得
 第十條 保安林ノ接續地ニ火入ヲ爲サントスル者ハ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ
 第十一條 保安林ニ於テ皆伐ヲ爲シタル者又ハ第五條ノ命令ニ違背シタル者ハ伐木シタル木材ノ代價ニ相當スル罰金ニ處ス
 保安林ニ於テ開墾ヲ爲シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 保安林ニ於テ盜伐ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ贖額二倍ニ相當スル罰金ヲ附加ス但シ罰金ハ二十圓以下ニ下スコトヲ得ス
 保安林ニ放火シタル者ハ輕懲役ニ處ス因テ主産物ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス
 火ヲ失シテ保安林ヲ燒燬シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第四條第十條ノ規定ニ違背シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
 保安林ノ爲設ケタル標識ヲ移轉シ若ハ毀壞シタル者ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十二條 此ノ規則ニ規定シタル罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪併發ノ例ヲ用非ス
 第十三條 此ノ規則ニ定メタルモノノ外必要ナル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム
 附 則
 第十四條 此ノ規則ハ明治三十四年十月一日ヨリ施行ス

●會計、官有財產

○臺灣ニ於ケル政府ノ工事及物件ノ買入借入ニ關スル隨意契約明治三十四年五月勅令第三百二十號
朕臺灣ニ於ケル政府ノ工事及物件ノ買入借入ニ關スル隨意契約ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣ニ於ケル政府ノ工事及千五百圓ヲ超エサル物件ノ買入借入ハ競争ニ付セス隨意契約ニ依ルコトヲ得

附則

明治二十九年勅令第三百十號及明治三十一年勅令第二百二十九號ハ之ヲ廢止ス

●租稅 附專賣

○臺灣關稅規則並臺灣輸出稅及出港稅規則ニ依ル訴願ニ關スル件明治三十四年十月律令第十三號
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣關稅規則並臺灣輸出稅及出港稅規則ニ依ル訴願ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

三十四年及一
三十三丁參看

三十四年及一
三十三丁參看

臺灣關稅規則並臺灣輸出稅及出港稅規則ニ依ル訴願ニ關シテハ明治二十三年法律第百五號訴願法ヲ準用ス

○砂糖消費稅法明治三十四年八月勅令第五百五號
朕砂糖消費稅法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
砂糖消費稅法ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ臺灣ニ施行ス
前項ノ法律ノ施行規則ハ臺灣總督之ヲ定ム

○糖業稅則廢止明治三十四年八月律令第七號
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル糖業稅則廢止ノ律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
明治二十九年日令第十一號糖業稅則ハ明治三十四年九月三十日限之ヲ廢止ス

○砂糖、糖蜜又ハ糖水ヲ本島ヨリ内地へ輸送スル場合ニ關スル件明治三十四年八月律令第八號
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル砂糖、糖蜜又ハ糖水ヲ本島ヨリ内地へ輸送スル場合ニ關スル律令

第二十八號
臺灣ニ於ケル政府ノ工事及物件ノ買入借入ニ關スル隨意契約規則並臺灣關稅規則並臺灣輸出稅及出港稅規則ニ依ル訴願ニ關スル件
砂糖消費稅法ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ臺灣ニ施行ス
前項ノ法律ノ施行規則ハ臺灣總督之ヲ定ム

勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
砂糖、糖蜜又ハ糖水ヲ本島ヨリ内地へ輸送スル場合ニ於テハ臺灣關稅規則中輸出ニ關スル規定ヲ準
用ス

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○砂糖、糖蜜、糖水ノ課稅ニ關スル件明治三十四年九月
律令第十二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル砂糖、糖蜜、糖水ノ課稅ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第一條 明治三十四年法律第十三號砂糖消費稅法施行前製造場ヨリ引取リタル砂糖、糖蜜、糖水ニ付
テハ明治三十四年十月二十日迄ニ其旨ヲ地方官廳ニ届出ツヘシ

前項ノ届出アリタル砂糖ニ付テハ明治二十九年日令第十一號糖業稅則ヲ適用シ直チニ其稅金ヲ納
付セシム

第二條 前條ノ届出ヲ爲ササル砂糖、糖蜜、糖水ニ付テハ砂糖消費稅法ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ明治三十四年十月二十一日現ニ砂糖、糖蜜、糖水ヲ藏置スル場所ハ砂糖消費稅法
中製造場ト見做シ砂糖、糖蜜、糖水ヲ所持スル者ハ同法中ノ製造スル者又ハ製造者ト見做ス但シ届
出ヲ爲ササル砂糖ヲ十月二十日以前ニ本島外ニ搬出スル場合ニ在テハ搬出者ヲシテ納稅セシム

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣輸出稅及出港稅規則附屬稅表中改正明治三十四年八月
律令第九號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣輸出稅及出港稅規則附屬稅表中改正ノ律令勅裁ヲ得テ茲ニ之
ヲ發布ス

明治三十二年律令第十九號臺灣輸出稅及出港稅規則附屬稅表中左ノ通改正ス

番 號	品 名	數 量	從 量 稅 率
一四	赤 砂 糖	每 百 斤	四五〇
一五	白 砂 糖	同	五六〇

附則

本令ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十九年日令第十一號糖業稅則第九條ニ依リ納稅シタル砂糖ヲ本令施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ
輸出スルトキハ赤砂糖ニハ百斤ニ付金十五錢白砂糖ハ百斤ニ付金二十一錢ノ輸出稅ヲ課スルモノト
ス

●運輸、通信、船舶

○臺灣汽船検査規則中改正明治三十四年六月
律令第五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣汽船検査規則中改正律令勅諭ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

明治三十二年律令第十號臺灣汽船検査規則中左ノ通改正ス

第十條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十條ノ二 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用井ス

前條ノ罰則ハ船長ニ代リテ其職務ヲ行フ者ニモ之ヲ適用ス

第十三條中臺灣沿岸ノ下ニ「若ハ河港内」ヲ加ヘ「若ハ」ヲ「又ハ」ニ改メ更ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ規定ハ日本臣民ニ於テ借入レ臺灣各港ノ間又ハ臺灣ト外國トノ間ニ使用スル外國汽船及臺灣ノ沿岸若ハ河港内ノミヲ航行スル外國汽船ニモ適用ス

○臺灣船籍規則中改正明治三十三年十月
律令第十九號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣船籍規則中改正ノ律令勅諭ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

明治三十一年律令第四號臺灣船籍規則中左ノ通改正ス

第一條 臺灣ニ住所シ有スル日本臣民ノ所有ニ屬スル船舶又ハ臺灣ニ本店ヲ有スル商會社ニシテ合名會社ニ在テハ社員ノ全員、合資會社及株式合資會社ニ在テハ無限責任社員ノ全員株式會社ニ

在テハ取締役ノ全員カ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶又ハ臺灣ニ主タル事務所ヲ有スル法人ニシテ其代表者ノ全員カ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶ハ日本船舶トシテ臺灣ニ船籍港

ヲ定メ所轄辨務署ノ船籍ニ編入スヘキモノトスルニシテ臺灣ニ住所ヲ有セサル日本臣民又ハ内地ニ本店若ハ主タル事務所ヲ有スル前項法人ノ所有ニ屬スル船舶ト雖内地ニ於テ船籍ヲ定メシテ臺灣沿岸ヲ航行シ又ハ臺灣ヲ起點トシテ内地若ハ外國ニ

航行スルモノハ前項ニ依ルル前二項ノ船舶ニシテ船籍ニ編入セントスルトキハ所轄辨務署ヲ經由シテ地方官廳ニ其積量ノ測度

ヲ申請スヘシ
第二條 第四條第五條第七條乃至第九條及第十三條中「船舶證書」ヲ「船舶國籍證書」ニ改ム

第三條及第六條中「船籍證書」ヲ「船舶國籍證書」ニ「假船籍證書」ヲ「假船舶國籍證書」ニ改ム

第四條中「帝國國旗」ヲ「日本國旗」ニ改ム
第四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ第五條ヲ第六條ニ改メ以下順次繰下ク
第五條 船舶法第一條ニ依リ日本船舶タルモノ及此規則ニ依リ船舶國籍證書若ハ船鑑札ヲ有スル船

船ニアラサレハ臺灣不開港場ニ寄港シ又ハ臺灣各港ノ間ニ於テ物品又ハ旅客ノ運送ヲ爲スコトヲ得ス但法令若ハ條約ニ別段ノ定アルトキ海難者ハ捕獲ヲ避ントスルトキ又ハ臺灣總督ノ特許ヲ得サルトキハ此限ニアラス

第九條中「帝國國旗」ヲ「日本國旗」ニ「帝國船舶」ヲ「日本船舶」ニ改ム

第九條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ第十條ヲ第十二條ニ改メ以下順次繰下ク

第十一條 第五條ノ規定ニ違反シタルトキハ船長ヲ二百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處シ船舶ヲ沒收ス

第十條中「第五條乃至第八條」ヲ「第六條乃至第九條」ニ改メ同條第一項ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

前項ノ場合ニ於テ刑法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ依リ船舶所有者ノ罪ヲ論スヘカラサルトキハ其法定代理人ヲ罰ス

第一項ノ規定ハ船舶管理人又ハ商事會社其他ノ法人ノ代表者若ハ清算人ニ之ヲ適用ス

附則

從來交付シタル船籍證書又ハ假船籍證書ハ船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ト同一ノ効力ヲ有ス

○臺灣汽船職員規則明治三十四年九月

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣汽船職員規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣汽船職員規則

第一條 臺灣ニ船籍ヲ有スル汽船職員ハ海技免狀ヲ有スル者ニアラサレハ其職務ヲ行フコトヲ得ス

汽船職員ト稱スルハ船長、一等運轉士、二等運轉士、機關長及一等機關士ヲ謂フ

第二條 海技免狀ハ左ノ十種トス

甲種 船長

甲種一等運轉士

甲種二等運轉士

乙種 船長

乙種一等運轉士

乙種二等運轉士

機關長

一等機關士

二等機關士

三等機關士

第三條 海技免狀ハ船員試驗規程ニ依リ試驗ヲ受ケ合格シ且船員名簿ニ登錄ヲ受ケタル者ニ授與ス

三十三年
八月廿五日
汽船職員
試驗規程
ヲ定ム

海軍艦船艇ニ乗組ミ運航若ハ機關運轉ニ從事シ又ハ商船學校全科卒業證書若クハ外國政府ノ海技免狀ヲ有シ臺灣總督ニ於テ船員試驗規程ニ合格スト認メタル者ニハ試驗ヲ用井ヌシテ相當ノ海技免狀ヲ授與ス

第四條 高等ノ免狀ハ下等ノ免狀ニ代用スルコトヲ得

甲種船長ノ免狀ハ他ノ船長及運轉士ノ免狀ニ對シ、甲種一等運轉士ノ免狀ハ他ノ運轉士ノ免狀ニ對シ、甲種二等運轉士ノ免狀ハ乙種各運轉士ノ免狀ニ對シ、乙種船長ノ免狀ハ乙種各運轉士ノ免狀ニ對シ、乙種一等運轉士ノ免狀ハ乙種二等運轉士ノ免狀ニ對シ各高等ノ免狀トス
機關長ノ免狀ハ一等機關士以下ノ免狀ニ對シ、一等機關士ノ免狀ハ二等機關士以下ノ免狀ニ對シ、二等機關士ノ免狀ハ三等機關士ノ免狀ニ對シ各高等ノ免狀トス

第五條 汽船所有者汽船管理人若クハ汽船借入人ハ別表ニ從ヒ相當ノ海技免狀ヲ受有スル職員ヲ其ノ汽船ニ乗組マシムヘシ

第六條 左ノ事項ニ該當スルトキハ汽船職員トシテ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪セラレ復權セサル者及公權停止中ノ者
 - 二 家資分散又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者及身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者
 - 三 執職ヲ禁止セラレタル者若ハ執職停止中ノ者
- 第七條 左ニ掲クル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第五條ニ違背シタル者

二 第六條ニ違背シタル者又ハ相當ノ海技免狀ヲ受有セスシテ汽船職員ノ職務ヲ行ヒタル者

三 海技免狀ヲ貸與シ之ヲ行使セシメタル者

四 執職ノ假停止ヲ受ケ汽船職員トシテ其ノ職務ヲ行ヒタル者

第八條 汽船所有者、汽船管理人、汽船借入人第五條ニ違背シタル場合ニ於テ刑法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ依リ其ノ罪ヲ論スヘカラサルトキハ其ノ法定代理人ヲ罰ス

會社其ノ他ノ法人第五條ニ違背シタルトキハ其ノ代表者又ハ清算人ヲ罰ス

第九條 此ノ規則ニ定メタルモノノ外必要ナル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

附 則

第十條 船舶法第一條ニ依リ日本船舶タル汽船ニシテ臺灣ノ沿岸若ハ河港ヲ航行シ又ハ臺灣ヲ起點トシ外國ニ航行スルモノハ此ノ規則ニ從ヒ汽船職員ヲ乗組マシムヘシ

前項ノ規定ハ臺灣ノ沿岸若クハ河港ヲ航行スル外國汽船ニモ之ヲ適用ス

第十一條 船舶職員法ニ依リ海技免狀ヲ有スル者ハ此ノ規則ニ於ケル相當ノ汽船職員タルコトヲ得

第十二條 此ノ規則施行ノ際現ニ汽船職員トシテ其ノ職務ニ従事スル者ハ此ノ規則施行ノ日ヨリ六箇月間ニ限リ海技免狀ヲ受有セスシテ其ノ職務ヲ行フコトヲ得

第十三條 此ノ規則ハ明治三十四年十月一日ヨリ施行ス

(別表)

航路		遠洋		航汽		近海		航汽		沿海	
定	登簿噸數	三百噸未滿	三百噸未滿	三百噸以上	三百噸以上	百噸未滿	五百噸未滿	五百噸未滿	五百噸以上	百噸未滿	二百噸未滿
職	員名稱	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機二船 等 等	一機二船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等
免	狀種類	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等
定	員	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長

航路		平水		航汽	
定	登簿噸數	二百噸以上	二百噸未滿	百噸以上	百噸未滿
職	員名稱	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等	一機一船 等 等
免	狀種類	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等	一甲一船 等 等
定	員	士長士長	士長士長	士長士長	士長士長

○臺灣鐵道營業ニ關スル件 明治三十三年八月 律令第十六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣鐵道營業ニ關スル律令勅令ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣鐵道營業ニ關スル律令

第一條 鐵道營業ニ關シテハ明治三十三年法律第六十六號鐵道營業法ニ依ル

第二條 鐵道營業法中命令ヲ以テ定ムヘキ事項ハ臺灣總督之ヲ定ム

鐵道營業法中主務大臣ノ職務ニ屬セシメタルモノハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

第三條 本令ノ施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

○

○郵便法郵便爲替法鐵道船舶郵便法及電信法ヲ臺灣ニ施行 明治三十三年八月 勅令第三百三十九號

第三十三年府令
第三百三十八號ヲ以テ
三月二十四日施行

朕郵便法郵便爲替法鐵道船舶郵便法及電信法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
郵便法郵便爲替法鐵道船舶郵便法及電信法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ臺灣ニ施行ス

●刑事、民事、警察、監獄

○刑事訴訟手續ニ關スル律令明治三十四年五月律令第四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル刑事訴訟手續ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

刑事訴訟手續ニ關スル律令

第一條 檢察官又ハ司法警察官ハ刑事訴訟法第四百四十四條及第四百四十七條ノ處分ヲ爲スニ當リ犯所ニ臨檢スル必要ナシト認メタルトキハ臨檢ヲ爲サスシテ其處分ヲ爲スコトヲ得

第二條 檢察官ハ現行犯ニ非サル事件ト雖捜査ノ結果急速ノ處分ヲ要スルモノト思料シタルトキハ公訴ヲ提起セサル前ニ限リ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ禁錮以上ノ刑ニ該當スルモノト思料シタルトキハ拘留狀ヲ發シ又ハ檢證差押若クハ搜索ヲ爲スコトヲ得但拘留後二十日以内ニ起訴セサルトキハ之ヲ釋放スヘシ

第三條 法院又ハ判官ハ刑事事件ニ付法院所在地外ニ於テ證據採取ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ司法警

察官ニ左ノ事項ヲ爲サシムルコトヲ得

- 一 檢帶搜索及物件差押
- 二 證人及參考人ノ取調
- 三 鑑定ヲ命スルコト

前項ノ場合ニ於テ證人鑑定人ニ付テハ刑事訴訟法第四百四十四條第二項ヲ適用ス

第四條 匪徒刑罰令違犯事件ニ付テハ刑事訴訟法第二百三十七條ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得

○臺灣保安規則明治三十三年十一月律令第二十一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣保安規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣保安規則

第一條 本島ニ在住スル内地人又ハ外國人ニシテ左ノ事項ノ一ニ該當スル者ト認ムルトキハ地方長

官ハ豫戒命令ヲ爲スコトヲ得

- 一 一定ノ住居及生業ヲ有セスシテ諸方ヲ徘徊スル者
- 二 平常粗暴ノ言論行爲ヲ事トスル者又ハ他人ノ身上若ハ行爲ニ對シ非議謔語ヲ事トスル者
- 三 何等ノ口實ヲ以テスルニ拘ラス他人ニ對シ脅迫ニ涉ル言論行爲ヲ爲ス者又ハ他人ノ行爲業務ニ干渉シ其事由ヲ妨害スル者

- 四 無根ノ流言ヲ作為シ口頭又ハ文書圖畫ニ依リ之ヲ世間ニ流布スル者
- 五 他人ヲ教唆シ第二號乃至第四號ノ言論行為ヲ爲サシメタル者
- 第二條 豫戒命令ハ書面ヲ以テ必要ト認ムル行為不行爲ヲ戒告スルモノトス
前項ノ書面ハ之ヲ本人ニ下付シ同時ニ之ヲ其地方ニ於テ公布ス
- 第三條 豫戒命令ヲ受ケタル者改悛ノ狀顯著ナルトキハ地方長官ハ其命令ヲ解除スルコトヲ得此場
合ニ於テハ同時ニ之ヲ其地方ニ於テ公布ス
- 第四條 地方長官ハ本島在住ノ内地人又ハ外國人ニシテ左ノ事項ノ一ニ該當スル者ニ對シ一年以上
三年以下本島在住ヲ禁止スルコトヲ得
 - 一 治安ヲ妨害セントシ又ハ風俗ヲ壞亂セントスル者
 - 二 二回以上引續キ豫戒命令ヲ受ケルモ其行為ヲ改メサル者
- 第五條 在住ヲ禁止セラレタル者ハ十五日以内ニ本島外ニ退去スヘシ
期限内ニ退去セシメ難キ正當ノ理由アルトキハ地方長官ハ相當ノ猶豫期限ヲ與フルコトヲ得
- 第六條 在住禁止ノ命令ヲ受ケタル者其命令ニ對シ不服アルトキハ命令ヲ受ケタル日ヨリ三日以内
ニ地方長官ヲ經テ臺灣總督ニ命令取消ノ申請ヲ爲スコトヲ得
前項ノ場合ニ於テハ其命令ノ執行ヲ停止セス
- 第七條 前條ノ申請ヲ受ケタルトキハ臺灣總督ハ其實質ヲ審査シ地方長官ノ命令ヲ認可シ若ハ之ヲ
取消スヘキ命令ヲ爲スヘシ

- 第八條 在住ヲ禁止セラレタル者營業上若ハ其他ノ關係ニ於テ其地ヲ去リ難キ事情アリト認ムルト
キハ地方長官ハ其期限間相當ノ保證金ヲ出サシメ在住セシムルコトヲ得
- 第九條 保證金ヲ出シ在住ノ許可ヲ得タル者其期限内再第四條ニ該當スルトキハ其保證金ヲ沒收シ
仍住在ヲ禁止スヘシ
- 第十條 在住禁止ノ命令ヲ受ケタル者改悛ノ狀顯著ナルトキハ地方長官ハ何時ニテモ其命令ヲ取消
スコトヲ得
- 第十一條 退去期限内若ハ猶豫期限内ニ退去セサル者又ハ禁止期限ヲ犯シタル者ハ一月以上一年以
下ノ重禁錮ニ處ス
前項ノ處刑ヲ受ケタル者ハ出獄後十五日以内ニ本島外ニ退去スヘシ違犯者ニハ前項ヲ準用ス
- 附 則
- 第十二條 此規則ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○ 臺灣家屋建築規則 明治三十三年八月
律令第十四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣家屋建築規則勅諭ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
臺灣家屋建築規則

第一條 家屋ヲ建築セントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ増築又ハ改築セント

スルトキ亦同シ

- 一 敷地ノ面積及位置ノ表示
- 二 設計及仕様書
- 三 建築物ノ平面圖、配置圖、側面圖及斷面圖又ハ矩計カキガキ

前號ノ外地方長官ニ於テ必要ト認ムル事項

第二條 前條ニ依リ建築シタル家屋及増築改築シタル部分ハ地方官廳ノ検査ヲ請ヒ其許可ヲ受クルニアラサレハ使用スルコトヲ得ス

第三條 地方長官ハ左ノ場合ニ於テ期限ヲ定メ家屋ノ改造、修補又ハ取毀ヲ命スルコトヲ得

- 一 公益ノ爲必要アリト認メタルトキ
- 二 危險ノ虞アリト認メタルトキ
- 三 健康ニ害アリト認メタルトキ

四 此規則若ハ此規則ニ基キ發布シタル命令ニ背キ又ハ第一條ニ依リ許可ヲ受ケタル事項ニ違ヒタルトキ

第四條 道路ニ傍フテ建築スル家屋ハ楹庇アル歩道(亭仔脚)ヲ設クヘシ但地方官廳ノ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

歩道ヲ設クヘキ道路並歩道及楹庇ノ幅員構造ハ地方長官之ヲ定ム

第五條 第三條ニ依リ家屋ノ改造修補又ハ取毀ヲ命セラレタル者其命令ヲ履行セス若ハ履行スルモ

期限内ニ終了スルノ見込ナキトキハ地方長官ハ地方税ヲ以テ之ヲ施行シ其費用ヲ義務者ヨリ徴收スルコトヲ得

義務者前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セザルトキハ臺灣租稅滯納處分規則ニ依リ徴收ス

第六條 第一條ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處シ第二條ニ違背シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 此規則ハ工場其他ノ建築物ニモ之ヲ準用ス

第八條 此規則施行ノ地域及時期ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

附 則

第九條 此規則ニ定ムルモノノ外必要ノ規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

○

○臺灣監獄則中改正明治三十三年九月 律令第十八號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣監獄則中改正ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

明治三十二年律令第三號臺灣監獄則中左ノ通改正ス

第五條 監獄則中内務大臣及府縣知事ノ職務ニ屬スルモノハ臺灣總督之ヲ行フ但監獄則第四條第二項ノ巡閱ヲ爲スヲ要セス

監獄則中看守長ノ職務ニ屬スルモノハ監獄監吏之ヲ行フ

附則

本令ハ明治三十三年十月一日ヨリ施行ス

●官制

○臺灣總督府官制中改正明治三十四年十一月
勅令第三百一號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第十條中「知事若ハ」ヲ削ル

第十七條 民政部ニ警察本署及左ノ五局ヲ置ク

總務局

財務局

通信局

殖産局

土木局

第十八條 總督官房警察本署及各局ノ事務ノ分掌及其ノ分課ハ總督之ヲ定ム

正編下卷一
九二丁參看

第十九條 總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

民政長官 一人 勅任

參事官長 一人 勅任

警視總長 一人 勅任又ハ奏任

局長 四人 勅任又ハ奏任

參事官 專任四人 奏任

事務官 專任十五人 奏任

警視 專任三人 奏任

技師 專任十八人 奏任

翻譯官 專任五人 奏任

屬

警部

技手

通譯

專任三百二十人 判任

第二十條 民政長官ハ總督ヲ佐ケ部務ヲ總理シ各局署ノ事務ヲ監督ス

第二十一條 參事官長ハ總督及民政長官ヲ佐ケ、總務局長ト爲リ及審議立案ニ關スル事務ヲ管理ス

第二十二條 警視總長ハ警察本署ノ長トナリ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ事急ナル

第二十八號 臺灣總督府官制中改正

三百四十三

場合ニ在テハ其ノ主管事務ニ付廳長以下ヲ指揮スルコトヲ得

第二十二條ノ二削除

第二十三條 局長ハ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス

第二十四條 參事官ハ上官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル

參事官ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房又ハ各局署ノ事務ヲ助ク

第二十五條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房又ハ各局署ノ事務ヲ掌ル

第二十六條 警視ハ警察本署ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ其ノ事務ヲ掌ル

第二十七條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

技師ハ上官ノ命ヲ承ケ各局ノ事務ヲ助ク

第二十八條 翻譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ通譯ヲ掌ル

第二十九條 總督官房及局署中各課ニ課長一人ヲ置キ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ

課長ハ上官ノ命ヲ承ケ課務ヲ掌理ス

第三十條 屬、技手及通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術通譯ニ從事ス

第三十一條 警部ハ警察本署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ事務ニ從事ス

附則

臺灣總督府度量衡司檢所官制ハ之ヲ廢止ス

正編下卷一
九六丁參看

○ 臺灣總督府評議會章程中改正明治三十四年十一月勅令第百七號

朕臺灣總督府評議會章程中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府評議會章程中左ノ通改正ス

第一條第一項ヲ左ノ如ク改ム

臺灣總督府ニ評議會ヲ置キ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス

總督

民政長官

陸軍幕僚參謀長

海軍參謀長

參事官長

覆審法院長

覆審法院檢察官長

警視總長

局長

參事官 兼任ハ二人ヲ限ル

事務官 三人以内

但シ陸軍幕僚參謀長及海軍參謀長ハ會議ノ事件軍事ニ關涉スル場合ニ限リ議事ニ參與スルモ
ノトス

○臺灣總督府海軍幕僚條例中改正明治三十四年七月勅令第四百四十二號

朕臺灣總督府海軍幕僚條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海軍幕僚條例中左ノ通改正ス

第二條 臺灣總督府海軍幕僚トシテ左ノ職員ヲ置ク

參謀長

參謀

副官

主計長

前項ノ外海軍通譯官ヲ置ク

第四條 參謀ハ參謀長ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス

第六條及第七條ヲ削ル

第九條中「造船技士主理及」ヲ削ル

第十條中「海軍下士並判任文官」ヲ「海軍書記」ニ改ム

正編下卷一
九八丁參看

正編下卷二
〇〇丁參看

別表ヲ削ル

附 則

本令ハ明治三十四年七月四日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府地方官官制明治三十四年十二月勅令第三百二號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府地方官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府地方官官制

第一條 臺灣ニ左ノ廳ヲ置ク其ノ位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

臺北廳

基隆廳

宜蘭廳

深坑廳

桃仔園廳

新竹廳

苗栗廳

臺中廳

第二十八號 臺灣總督府地方官官制中改正 臺灣總督府地方官官制

彰化廳
南投廳
斗六廳
嘉義廳
鹽水港廳
臺南廳
番薯寮廳
鳳山廳
阿猴廳
恆春廳
臺東廳
澎湖廳

第二條 各廳ニ左ノ職員ヲ置ク

廳長 奏任 一人
 屬 判任
 警部 判任
 技手 判任

通譯 判任

警部補 判任

第三條 廳判任官ハ各廳ヲ通シテ專任千二百三十人ヲ以テ定員トス

各廳ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定メ其ノ各官ノ定員ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ廳長之ヲ定ム

第四條 廳長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理ス

第五條 廳長ハ部内ノ行政事務ニ付其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其ノ一部ニ廳令ヲ

發シ之ニ十圓以内ノ罰金若ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條 廳長ハ管内ノ警備ヲ維持スル爲兵力ヲ要スルトキハ之ヲ臺灣總督ニ具狀スヘシ但シ非常急

變ノ場合ニ際シテハ直ニ其ノ附近地ノ旅團長若ハ守備隊長ニ出兵ヲ要求スルコトヲ得

第七條 廳長ハ所部ノ官吏ヲ監督シ判任官ノ進退ヲ臺灣總督ニ具狀ス

第八條 廳長ハ廳中職務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第九條 廳長事故アルトキハ部下ノ屬及警部中ノ上席者其ノ職務ヲ代理ス

廳長ハ部下ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十條 廳中事務ノ分課ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十一條 廳長ハ廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲臺灣總督ノ認可ヲ經テ支廳ヲ置クコトヲ得

支廳長ハ屬、警部又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツ

第十二條 支廳長事故アルトキハ上席官吏其ノ職務ヲ代理ス

第十三條 屬ハ課又ハ支廳ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
第十四條 警部ハ課又ハ支廳ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル事務ニ従事シ部下ノ巡查及巡査補ヲ指揮監督ス

警部補ハ課又ハ支廳ニ分屬シ警部ノ職務ヲ補助ス

第十五條 技手ハ課又ハ支廳ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

第十六條 通譯ハ課又ハ支廳ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス

第十七條 巡查及巡査補ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十八條 廳ニ警察醫ヲ置キ判任官ノ待遇トス

第十九條 廳ニ參事ヲ置クコトヲ得

參事ハ各廳五人以内トシ判任官ノ待遇トス

參事ハ廳管轄内ニ居住シ學識名望アル者ニ就キ廳長之ヲ命ス

第二十條 參事ハ部内ノ行政事務ニ關シ廳長ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フルモノトス

參事ハ廳長ノ命ヲ承ケ事務ニ従事スルコトアルヘシ

○

○臺灣總督府監獄官制明治三十三年九月勅令第三百五十九號

朕臺灣總督府監獄官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府監獄官制

第一條 臺灣總督府監獄ハ臺灣總督ノ管理ニ屬ス

監獄ノ位置及名稱ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二條 各監獄ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク(三十四年勅令第七十號ヲ以テ修正)

典獄 三人 奏任

監吏 專任四十八人 判任

通譯 專任四十八人 判任

醫員 專任 十二人 判任

第三條 典獄ハ臺灣總督ノ監督ヲ承ケ監獄ノ長トナリ監獄ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ指揮監督ス

第四條 監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事シ又ハ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守以下ヲ指揮監督ス

第五條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス

第六條 醫員ハ上官ノ指揮ヲ承ケ醫務ニ従事ス(三十四年勅令第七十號ヲ以テ修正)

第七條 臺灣總督ハ第二條ノ職員ノ外須要ニ應ジ俸給定額内ニ於テ各監獄ニ技手ヲ置クコトヲ得

(全上)

第八條 技手ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事ニ従フ

第九條 典獄ハ判任官ノ進退ハ臺灣總督ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

第十條 典獄ハ所部ノ判任官ノ懲戒ハ臺灣總督ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

三十三條總督府令第七十七號ヲ以テ監獄ノ位置名稱ヲ定ム

三十二年總督府令第七十八號ヲ以テ監獄ノ名稱位置ヲ定ム

- 第十一條 典獄事故アルトキハ上席監吏其ノ職務ヲ代理ス
- 第十二條 臺灣總督府地方法院檢察官長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ監獄ニ關スル一切ノ事務ヲ監視シ意見ヲ付シテ臺灣總督ニ報告スヘシ
- 第十三條 臺灣總督ハ監獄ノ支監ヲ置クコトヲ得
- 支監長ハ監吏ヲ以テ之ニ充ツ典獄ノ指揮監督ヲ承ケ支監ノ事務ヲ掌理ス
- 支監長事故アルトキハ上席監吏其ノ職務ヲ代理ス
- 第十四條 看守ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府監獄看守定員中改正明治三十三年九月勅令第三百六十一號

朕明治三十二年勅令第五十四號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十二年勅令第五十四號中左ノ通改正ス

第一條中「臺灣總督府監獄」ヲ「臺灣總督府監獄」ニ改ム

第二條中「支署」ヲ「支監」ニ改ム

第四條中「監獄者」ヲ「監獄」ニ改ム

附則

正編下卷二二〇八丁參看

正編下卷二二〇九丁參看

本令ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府管內街、庄、社ニ長ヲ置ク件中改正明治三十四年十一月勅令第三百十五號

朕明治三十年勅令第五百十七號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十年勅令第五百十七號中左ノ通改正ス

第二條中「辨務署長」ヲ「廳長又ハ支廳長」ニ改ム

○臺灣總督府稅關官制明治三十四年四月勅令第四十九號

朕臺灣總督府稅關官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府稅關官制

第一條 臺灣總督府稅關ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 關稅、出港稅、噸稅及稅關諸收入ニ關スル事項
- 二 保稅倉庫其ノ他ノ倉庫ニ關スル事項
- 三 船舶及貨物ノ取締ニ關スル事項
- 四 臺灣關稅規則、臺灣輸稅及出港稅規則、臺灣噸稅規則犯則者ノ處分ニ關スル事項

正編下卷二二〇九丁參看

第二十八號 臺灣總督府監獄看守定員中改正 臺灣總督府管內街、庄、社ニ長ヲ置ク件中改正 臺灣總督府稅關官制

五 關稅通商ノ取締ニ關スル事項

第二條 左ノ二港ニ稅關ヲ置ク

臺北縣管下 淡水

臺南縣管下 安平

第三條 稅關ニ稅關長一人ヲ置ク奏任トス

淡水稅關長ハ安平稅關長ヲ兼ス

第四條 稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

事務官 專任 一人 奏任

鑑定官 專任 二人 奏任

屬 專任 四十八人 判任

監視 專任 二十人 判任

鑑定官補 專任 十五人 判任

監吏 專任 百三十四人 判任

第五條 稅關長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第六條 事務官ハ稅關長ノ事務ヲ助ク

稅關長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第七條 鑑定官ハ稅關長ノ命ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ關スル事務ヲ掌理ス

第八條 屬ハ稅關支署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第九條 監視ハ稅關監視部長若ハ稅關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ニ從事ス

第十條 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ從事ス

第十一條 監吏ハ稅關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ニ從事ス

第十二條 稅關ニ稅關監視部ヲ置ク

稅關監視部ニ部長一人ヲ置キ監視ヲ以テ之ニ充ツ

稅關監視部長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

第十三條 稅關管轄區域内必要ナル場所ニ稅關支署及稅關監視署ヲ置クコトヲ得

稅關支署ノ名稱位置及管轄區域並稅關監視署ノ名稱位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十四條 稅關支署ニ支署長一人ヲ置キ屬ヲ以テ之ニ充ツ

稅關支署長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ其ノ管轄内ノ稅關事務ヲ掌理ス

第十五條 稅關監視署ニ署長一人ヲ置キ監視若ハ監吏ヲ以テ之ニ充ツ

稅關監視署長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

附則

本令ハ明治三十四年四月十五日ヨリ之ヲ施行ス

五 關稅通路ノ取締ニ關スル事項

第二條 左ノ二港ニ稅關ヲ置ク

臺北縣管下 淡水

臺南縣管下 安平

第三條 稅關ニ稅關長一人ヲ置ク奏任トス

淡水稅關長ハ安平稅關長ヲ兼ス

第四條 稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

事務官 專任 一人 奏任

鑑定官 專任 二人 奏任

屬 專任 四十八人 判任

監視 專任 二十人 判任

鑑定官補 專任 十五人 判任

監吏 專任 百三十四人 判任

第五條 稅關長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第六條 事務官ハ稅關長ノ事務ヲ助ケ

稅關長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第七條 鑑定官ハ稅關長ノ命ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ關スル事務ヲ掌理ス

第八條 屬ハ稅關支署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第九條 監視ハ稅關監視部長若ハ稅關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處

分ニ關スル事務ニ從事ス

第十條 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ從事ス

第十一條 監吏ハ稅關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務

ニ從事ス

第十二條 稅關ニ稅關監視部ヲ置ク

稅關監視部ニ部長一人ヲ置キ監視ヲ以テ之ニ充ツ

稅關監視部長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

第十三條 稅關管轄區域内必要ナル場所ニ稅關支署及稅關監視署ヲ置クコトヲ得

稅關支署ノ名稱位置及管轄區域並稅關監視署ノ名稱位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十四條 稅關支署ニ支署長一人ヲ置キ屬ヲ以テ之ニ充ツ

稅關支署長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ其ノ管轄内ノ稅關事務ヲ掌理ス

第十五條 稅關監視署ニ署長一人ヲ置キ監視若ハ監吏ヲ以テ之ニ充ツ

稅關監視署長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則者ノ處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

附則

本令ハ明治三十四年四月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府稅關管轄區域明治三十四年四月勅令第五十二號

朕臺灣總督府稅關管轄區域ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府稅關管轄區域左ノ通之ヲ定ム

淡水稅關管轄區域

西螺溪ヨリ北方富基岬ヲ回リ南方花蓮港ニ至ル沿岸

安平稅關管轄區域

花蓮港ヨリ南方鶯鑿鼻ヲ回リ北方西螺溪ニ至ル沿岸及澎湖列島、小琉球島、紅頭嶼、火燒島ノ沿岸

附則

本令ハ明治三十四年四月十五日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府師範學校官制中改正明治三十四年十一月勅令第二百三號

朕臺灣總督府師範學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府師範學校官制中左ノ通改正ス

第一條第四條第九條中「知事屬長」ヲ「臺灣總督」ニ改ム

○臺灣總督府國語學校官制中改正明治三十三年十一月勅令第三百九十七號

朕臺灣總督府國語學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

第四條中「教授」ノ下及「助教授」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

第五條中「教諭」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

第六條中「舍監」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

第七條中「書記」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

○同 明治三十四年四月勅令第八十五號

朕臺灣總督府國語學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

第四條第一項中「七人」ヲ「十一人」ニ第二項中「十人」ヲ「十三人」ニ改ム

第五條中「二十四人」ヲ「二十六人」ニ改ム

第二十八號 臺灣總督府國語學校官制中改正
臺灣總督府國語學校官制中改正

正編下卷二
一七丁参考

○臺灣總督府國語傳習所官制中改正明治三十四年四月勅令第八十六號
朕臺灣總督府國語傳習所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語傳習所官制中左ノ通改正ス
第三條第一項中「五十一人」ヲ「十六人」ニ改メ第二項ヲ削ル
第四條中「二十八人」ヲ「六人」ニ改ム

○臺灣公學校官制中改正明治三十四年十一月勅令第二百六號

朕臺灣公學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣公學校官制中左ノ通改正ス

第二條中「辨務署長又ハ支署長」ヲ「廳長又ハ支廳長」ニ改ム

正編下卷二
一八丁参考

○臺灣總督府小學校官制中改正明治三十四年十一月勅令第二百四號

朕臺灣總督府小學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府小學校官制中左ノ通改正ス

正編下卷二
一九丁参考

第二條中「辨務署長又ハ支署長」ヲ「廳長又ハ支廳長」ニ改ム

○臺灣總督府圖書編修職員官制明治三十四年四月勅令第八十三號

朕臺灣總督府圖書編修職員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府圖書編修職員官制

第一條 教科用圖書ノ編修及檢定ノ事務ヲ掌理セシムル爲臺灣總督府ニ臨時左ノ職員ヲ置キ臺灣總

督ノ管理ニ屬セシム

編修官 專任二人

奏任

編修書記

專任五人

判任

第二條 編修官ハ上官ノ命ヲ承ケ圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務ヲ掌理ス

第三條 編修書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務ニ從事ス

○臺灣總督府郵便及電信局官制中改正明治三十四年五月勅令第九十二號

朕臺灣總督府郵便及電信局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府郵便及電信局官制中左ノ通改正ス

正編下卷二
二〇丁参考

第二十八號

臺灣總督府國語傳習所官制中改正
臺灣總督府小學校官制中改正
臺灣總督府圖書編修職員官制
臺灣總督府郵便及電信局官制中改正

第九條中「四百四十九人」ヲ「五百十四人」ニ改ム
第十條中「二人」ヲ「三人」ニ「十四人」ヲ「二十人」ニ改ム

○臺灣總督府電話交換局官制中改正明治三十四年四月勅令第七十七號

朕臺灣總督府電話交換局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府電話交換局官制中左ノ通改正ス

第四條 技師ハ各局ヲ通シテ專任二人奏任トス第三條ニ依リ局長タル者ノ外局長ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ分掌ス

第五條 書記ハ各局ヲ通シテ專任十二人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第六條 技手ハ各局ヲ通シテ專任十六人判任トス第三條ニ依リ局長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ従事ス

○臺灣海軍局官制明治三十四年四月勅令第七十九號

朕臺灣海軍局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣海軍局官制

第一條 臺灣海軍局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ船舶職員及水先人ノ試験、船舶ノ測度検査其ノ他法令ノ定ムル所ニ從ヒ管海官廳ノ事務ヲ掌ル

第二條 臺灣海軍局ニ左ノ職員ヲ置ク
局長 一人

海軍官 專任一人 奏任

書記 專任二人 判任

技手 專任三人 判任

第三條 局長ハ臺灣總督府高等官又ハ海軍官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 局長ハ臺灣總督ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理ス

第五條 海軍官ハ上官ノ指揮ヲ承ケ局務ヲ分掌ス

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ局務ニ従事ス

第八條 海軍官及技手ハ臨時命ヲ承ケ臺灣總督府ノ事務ヲ助ク

○臺灣總督府測候所官制明治三十四年四月勅令第八十一號

朕臺灣總督府測候所官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二十八號 臺灣總督府電話交換局官制中改正 臺灣海軍局官制

臺灣總督府測候所官制

第一條 臺灣總督府測候所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ測候ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 各測候所ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

所長 六人
技師 專任一人 奏任
技手 專任二十二人 判任

第三條 所長ハ技師又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ所内一切ノ事務ヲ掌理ス

第四條 技手ハ第三條ニ依リ所長タル者ノ外所長ノ指揮ヲ承ケ所務ニ従事ス

第五條 測候所ノ名稱及位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

○ 臺灣總督府海港檢疫所官制中改正明治三十四年四月 勅令第七十五號

朕臺灣總督府海港檢疫所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海港檢疫所官制中左ノ通改正ス

第四條第四項中「支所長ハ」ノ下ニ「海港檢疫官又ハ」ヲ加フ

○ 臺灣總督府臨時海港檢疫所官制明治三十三年十一月 勅令第四百三號

朕臺灣總督府臨時海港檢疫所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府臨時海港檢疫所官制

第一條 臺灣總督府臨時海港檢疫所ハ臨時海港檢疫ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 臨時海港檢疫所ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ知事廳長之ヲ管理ス

第三條 臨時海港檢疫所ノ開設及附屬ハ臺灣總督之ヲ告ホス

第四條 臨時海港檢疫所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人
臨時海港檢疫官補

臨時海港檢疫所書記

臨時海港檢疫員

臨時海港檢疫醫員

第五條 所長ハ臨時海港檢疫所所在縣、廳ノ警部長警部長ヲ置カサルニ於テハ廳長ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ知事廳長ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ノ監督ス

第六條 臨時海港檢疫官補及臨時海港檢疫所書記ハ縣、廳及其ノ所屬官衙判任官ヲ以テ之ニ充テ知事廳長之ヲ命ス

第七條 臨時海港檢疫員及臨時海港檢疫醫員ハ知事廳長之ヲ命シ其ノ待遇ハ判任トス

- 第八條 臨時海港檢疫官補ハ所長ノ指揮ヲ承ケ檢疫ニ從事ス
- 第九條 臨時海港檢疫所書記ハ所長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
- 第十條 臨時海港檢疫員ハ上官ノ指揮ヲ承ケ檢疫ニ從事ス
- 第十一條 臨時海港檢疫醫員ハ上官ノ指揮ヲ承ケ醫務ニ從事ス

○臺灣總督府專賣局官制 明治三十四年五月
勅令第三百十六號

朕臺灣總督府專賣局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府專賣局官制

- 第一條 臺灣總督府專賣局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌理ス
 - 一 樟腦、樟腦油、阿片及食鹽ノ收納、購買、賣渡、保管、製造及検査ニ關スル事項
 - 二 樟腦ノ製造特許及取締ニ關スル事項
 - 三 鹽田ニ關スル事項
- 臺灣總督府專賣局ハ當分ノ内衛生及殖産上試験ニ關スル事項ヲ兼掌ス
- 第二條 臺灣總督府專賣局ハ之ヲ臺北ニ置ク
- 第三條 臺灣總督府專賣局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長

次長	一人	奏任
事務官	九人	奏任
技師	七人	奏任
翻譯官	三人	奏任
書記	專任百五十四人	判任
技手	專任五十一人	判任
通譯	專任 四人	判任

第四條 前條定員ノ外必要ニ應シ俸給定額内ニ於テ技師及技手ヲ置クコトヲ得

第五條 局長ハ臺灣總督府民政長官ヲ以テ之ニ充ツ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ監督ス

局長ハ奏任官進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ自ラ之ヲ行フ

第六條 次長ハ局長ノ事務ヲ輔ケ局長事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス

第七條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ局務ヲ分掌ス

第八條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ分掌ス

第九條 翻譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ翻譯及通譯ノ事務ヲ分掌ス

第十條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第十一條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス

- 第十二條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス
- 第十三條 臺灣總督ハ必要ト認ムル地ニ支局ヲ置クコトヲ得
- 第十四條 支局長ハ事務官技師又ハ書記ヲ以テ之ニ充ツ
- 第十五條 支局長ハ局長ノ指揮監督ヲ承ケ支局一切ノ事務ヲ掌理ス

附則

- 第十六條 本令ハ明治三十四年六月一日ヨリ之ヲ施行ス
- 第十七條 臺灣總督府製藥所官制、臺灣鹽務局官制及臺灣樟腦局官制ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

正編下卷一二
二七丁一三三
丁發行

○臨時臺灣基隆築港局官制明治三十三年八月勅令第三百三十一號

朕臨時臺灣基隆築港局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時臺灣基隆築港局官制

- 第一條 臨時臺灣基隆築港局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ基隆築港ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第二條 臨時臺灣基隆築港局ニ左ノ職員ヲ置ク
 - 局長 一人局長
 - 事務官 專任 一人事務官

奏任

技師 專任 六人 奏任

書記 專任 十五人 判任

技手 專任 二十人 判任

通譯 專任 三人 判任

第三條 局長ハ臺灣總督府民政長官ヲ以テ之ニ充ツ

局長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

局長ハ奏任官ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第四條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ヲ掌ル

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ工務ヲ分掌ス

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工務ニ従事ス

第八條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス

○

○臨時臺灣土地調查局官制明治三十三年八月勅令第三百四十號

朕臨時臺灣土地調查局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時臺灣土地調查局官制

正編下卷一二
三四丁發行

第二十八條

臨時臺灣基隆築港局官制 臨時臺灣土地調查局官制